
転生

Freedom

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生

【Nコード】

N8295L

【作者名】

Freedom

【あらすじ】

いつもと変わらない日常を満喫していたら事故って死んで気がついたら神が「間違えて殺したからリリなのの世界に転生させてやる」っておい！リリなのかよ！まあいい、チート能力もらったし暴れてやるぜ！

作者が初投稿です。駄文ですが、よろしく願います！！

日常（前書き）

リリなの転生ものです。

初めての投稿なので駄文です。末永くよろしく願いします

日常

はじめまして

この小説の主人公、もとい、一般人の暁あかつき紅くれないです。

あ、もちろん男ですよ？

さて、これからもいつもと変わらない日々が続きます。ではどうぞ！

ちゅんちゅんと小鳥が鳴いている。

「うゝん眠い」

とそう言ってから俺の朝は始まる。

いつものように顔を洗い、朝食を食う。言い忘れたけど俺は一人暮らしだ。親は海外に子供を残して旅立っていった。しかも俺が寝ている間に！きつと笑っていたに違いない。見てないけど絶対そうだしきしよう。

「いつてきます」

誰もいない家にむかって言う。俺の家は一軒家だどこにでもあるよなやつだ。家賃は親からくる仕送りによって払っている。

さて、つまらない一日の始まりだ！

日常（後書き）

数分で思いついてしまった

日常崩壊（前書き）

連続です。

たぶん平日はあまり投稿できない

こんな駄文でも読んでくださるひとには申し訳ありません

日常崩壊

とりあえず家を出て学校に向かう。

俺の通っている普通高校はその名の通りなんの変哲もない”普通の高校である。

そして俺は自分の席に座りいつもと変わらないなあと思っていた。それもあと数時間もすれば終わりになることも知らずに・・・

「さーてと、帰るかな」

そう言つて、俺は家に帰る道を歩いていた。そして、悲劇は起こる・

「え？」

なぜそう言つたかはこの光景にある。

その光景は、自分にめがけて猛スピードで来ている大型トラックを見たからだ。しかも運転手の顔は真っ赤。明らかに飲酒運転だった。さらにそのことにきがついた時には、もう目の前にトラックがせまっていた。

あ、俺死ぬんだ。そう思ったのもつかの間にトラックは無情にも俺に突っ込んでいた。

そして俺が見たものは・・・目の前で土下座している爺だった。

「・・・・・・・・・・は？」

こう言った俺は決して悪くはないだろう。なにせ死んだと思ったら爺が無言で土下座をしていたからだ。

「あの〜？」

俺はなにを思ったのか爺に話しかけていた。すると爺から何か聞こえてきた。不思議に思って聞いてみると

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・・・・・・」

あやまっていた

日常崩壊（後書き）

呼んでくれてありがとうございます。

転生（前書き）

文が短くてさびしい

転生

「ち、ちよつとなんで謝ってるんですか？」
聞いてみても

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

効果がないので殴ってみることにしましたwww

では皆さんと一緒に、いつせいのせい！

バキ！！

と言っなんとも痛そうな音とともに
「へぶあ！」

と言っなんともまぬけな声が聞こえ、目の前には、爺が痙攣して横たわっていましたwww

十分ほどたつて爺がおきたので話を聞くと

「すまん、間違えて君を殺しちゃったわいww」

と言ってきたのでとりあえずリンチにしました。

そして話を進めていくと爺が

「こつちのせいで死んじやったんじゃし、転生する世界、能力などをそつちが決めてよいぞ？」
と言ってきた。

まさにチートフラグ！！

「えーとまず、行き先はリリなのの世界で！」
理由？
作者が好きだからだ！

「ではどのあたりからかの？」

「無印から頼む！」

「よし、分かったぞい。ではほかの事を決めようかの？」

「よしじゃあ、魔力、体力、気力、殺気、などをMAXにしてデバイスを作ってくれ。デバイスの名前はメサイアGでバリアジャケットはマクロスFのVF-25Gとまったく同じにしてくれ。」

「うむ、よからうしかしそうするとバリアジャケットではなくバリアーマーになるぞ？まあ、変形しても痛くないようにするし、いいんじゃないかな」

「おう、ありがとう。後俺をイケメンにしてなのはと同年にしてくれ。あつちに戸籍も用意してくれ。あと身体能力もMAXでお願い」

「なかなかのチートじゃな、わかった。そうしておこう。ではあつちに送るときに変えるからの？」

「あ、いい忘れてた。デバイスもう一つ作ってくれ、日本刀型のデバイスで近代ベルカ式で、俺に剣技を習得させといてくれ。」

「うむ、忘れずにやっておこう。デバイスは両方ともAI搭載しとくからの？では、さようなら」

その言葉とともに俺の下に穴ができて、俺は落ちていった。そのときと言った言葉はもちろん

「あの、糞爺~~~~~」

です。ベタ過ぎる

そして俺の意識は闇に落ちていった

転生（後書き）

これからもがんばります。
感想待ってます！

来ちゃった（前書き）

今回でりりなのの世界に着きます

来ちゃった

「う、うーん」

と、気がつく。と、そこには

「大丈夫なの？」

と首をかしげる未来の魔王サマがいましたとさ。

「へーそれじゃあ紅君はお引越してきたの？」

「うん、そうだよ。なのはちゃん。」

何故か仲良しになってた！？

なんか言い訳に嘘（引っ越してきたこと）を言って何とかごまかしたあと、帰ろうとしたら

「帰っちゃうの？（ウルウル＋涙目）」

と言う殺人コンボがましてくれました。

誰だ！この子にそんなこと教えたやつは！名乗り出る！！

「いや、もうちょっと遊んでいこうかな？」

と言うと

「やったー！」

と、喜んでくれました。めっちゃカワイイ

そしてさっきのような質問をかわしたあと、二人で遊んでいました。

そして、なのはと分かれた後に気がついたこと

俺の家どこ？

そう思ったら

「君の家、翠屋の隣にしたいよ。後お金の通帳に送つていたぞい。ちなみに通帳家の中。」

つて教えてくれた。

「ありがとう神よ。で、家ってどんなの？」

「一軒家じゃ」

「また、一人暮らしに逆戻りか？」

そう思いながら翠屋への道（神が教えてくれた）をとぼとぼと歩いた。

その後、家について、通帳見たら、ゼロがすごくいっぱいあった。奮発しすぎだろ・・・

その金一万円引き出して飯買って帰った。子供の体って不便だね！！

そう思いながら睡眠の中へ落ちていった。

来ちゃった（後書き）

短いしか書けない（涙）

主人公設定（前書き）

設定です。

主人公設定

あかつきくれない
暁 紅

本作の主人公。

容貌 現時点では黒髪黒目のイケメン。

髪型 何処にでも居そうな髪型

身長 139cm

体重 25kg

家族は転生前は3人家族で、両親は、海外に出ていない。転生後は、すでに両親は他界しており、現在は一人暮らし。

魔力光は深い青

デバイス

メサイアG

武装 マクロスFのミ エルのVF-25Gと同じ武装

バリアジャケットもVF-25Gと同じ容姿で変形する機体で、ジャケットではなくむしろ、アーマーである。弾丸は、使用者の魔

力を圧縮し、発射する。最大圧縮をすると、未来のなのはの本気のプロテクションをらくらくつきぬけることが出来る。ロングレンジパックを装着するときは、一発一発の圧縮された魔力の弾丸の圧縮率が飛躍的に上がり、自身が通常装備で出来る最大圧縮率を軽く上回ってしまう。このスーパーパック装備時は説明どおり、最強である。しかも、連続で撃ち続けても圧縮率は変わらないという高スペックである。これにより、スーパーパックは緊急事態ではない限り装備することはない。これからのことに期待大である。

通常は飛行機の形をした、キーホルダーの形をしている。色は青。

黒刀

容貌 黒い刀でカートリッジシステムを搭載している。薬莢排出口は鐳の付け根がスライドし、出てくる。通常はブレスレットの形をしている。

説明 いつも最高の状態であり、たとえ折れてもすぐに元通りになれる。その刃には魔力を圧縮することによって表面に魔力刃を形成し、たとえAMF下でも形成できる。そして、圧縮率を上げることに よって何でも切断できるようになる。たとえばプロテクションでも完璧に切断できる。

主人公設定（後書き）

メサイアGが最強すぎたWWW

隠し事（前書き）

疲れた

隠し事

（マスター、朝ですよ）

（朝ですねえ。早く起きてください。遅刻しますよ？）

「うん、わかった」

そして俺は顔を洗って、着替えて・・・俺、何と会話したんだ？
そう思っていたら

（はやくしてください）

（遅刻しますよ）

いつの間にかしていたブレスレットとズボンにつけていたキーホルダーがしゃべった。

「お前たちは俺が神に頼んだデバイスか？」

メ（そうです。私はメサイアGです。）
とブレスレットが

黒（よろしくお願いします。私の名は黒刀です）

とキーホルダーがしゃべった。

「よろしくな？メサイア、黒刀」

（イエス、マイロード）「じゃあ、性能を試したいから、公園に行こう？それからだ。」

公園に着いて

「メサイア、結界展開」

すると、半径1キロにわたり、結界が張られた。

「じゃあ、始めるか。メサイア、セットアップ！」

すると、メサイアが光だした。余りの明るさに目を瞑っていた

光が収まり目を開くと俺はVF-25Gになっていた。

右手にはライフル、左腕の真ん中にはシールドが装備されていた。

「おお～すげ～」

メ（マスター、ライフルの説明を行いますますがよろしいですか？）

「よろしく頼む」

メ（ではまず、このライフルの弾の説明を行います。ライフルの弾はマスターの魔力を圧縮しそれを弾として発射します。この魔力の圧縮率はマスターが自由に操作できます。最大圧縮率だと、この世界の中では19歳のころの、なのは嬢の本気のプロテクションをらくらく貫けます。ここまでで質問がありますか？）

「その魔力の圧縮は俺が制御するのか？」

メ（いえ、マスターから指示があれば私が行います。なにも指示されなければ、大体最大圧縮率の20%ほどの圧縮率の弾を作ります。それでも、この時代のなのは嬢のプロテクションを貫通できますが）

「ふむ、では実際に撃ってみるか、メサイア、的作れるか？」

メ（おまかせください。）

すると、深い青色のスフィアが10個展開された。

「では、やるとするか。メサイア、魔力圧縮率30%」

メ（イエッサー魔力圧縮開始・・・完了。連射してもかまいません。

）

「わかった。では始めるか」

そういつてライフルをスフィアに向けて構える。そして・・・

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン

メ（全弾命中。さすがです。マスター）

「いや、それほどでもないよ・・・では次に黒刀、セツトアップ」

また激しい光がおき収まったときには、黒い服を身にまとい、黒いマントをつけ、腰に黒い刀を帯刀している黒い剣士がいた。

黒（ではマスター、私の説明を行います。私はいつも最高の状態に戻るという性質があり、たとえ折れてもすぐに元どおりになります。そして私もマスターの魔力をその身に圧縮させることで表面に魔力刃を形成できます。最大圧縮時にはすべての物が切れます。ご注意ください。これだけです。質問はありますか？）

「そうだな、その圧縮して出来た魔力刃は斬撃としてとばせられるか？」

黒（飛ばせます）

「よし、分かった。もうないな・・・そういえばメサイア、お前とセットアップしたときってどうやって飛ぶんだ？」

メ（それはマスターの魔力を燃料の代わりとしています。マスターの魔力は無限です。魔力切れなど起きないのでご安心を）

「わかった。ありがとう」

メ（それとロングレンジパックのことをご説明したいのですが、邪魔が入ったようです。）

「邪魔？・・・あれか」

その視線の先には・・・

「紅君、魔法使いだったの？」

なのはだった・・・orz

隠し事（後書き）

ばれちゃいました

約束（前書き）

ユニーク750超えてた

うれしい

ちなみにデバイスとの会話は作者が英語ぜんぜんだめなので日本語で書いています。

約束

な「紅君、魔法使いだったの？」

紅「な、なのはちゃん!？」

すると、なのはの肩の乗っていたフェレットがしゃべりだした。

ユ「あなたはなのと同じ魔法使いなのですか？」

紅「フェレットがしゃべった?・・・ああ、そうか」

ユ「ああ、すいません。僕はユーノ・スクライアといいます。では、もう一度問います、あなたは魔法使いなんですか? (すごい魔力だ。油断できないな)」

な「魔法使いなの?」

紅「そうだね、俺は魔法使いだ。少なくともなのはよりは強いよ?」

な「にゃあ!?!? そうだったの? 私よりも強いのか?」

ユ「なのは、彼の言っていることは本当だと思う。感じてみて、彼の魔力を、そのでかさを」

な「うん、わかった………にゃあ！？なにこの大きさ！？すっごーい私のより断然多いよ」（涙）」

紅「まあ、俺の魔力は無限だしな。で、お二人は何しに来たの？」

な「あ、それは……それは突然結界が張られたので何をしているのかの確認にきたんです。」ユーノくんそれ私の台詞」（涙）」

紅「それなら問題ないよ。俺はここでデバイスの性能テストをしていただけだから。なんならデバイス見せようか？ほら」

そういつてキーホルダーと刀をみせる

メ（はじめまして、なのは嬢、私はメサイアGです。先ほどはマスターに装備の説明をしていました。）

黒（私は黒刀、私もマスターに説明をしておりました。ちなみに通常、私はブレスレットになっています。）

な「紅君、デバイス二個も持ってたの？すっごーい。」

ユ「あなたは、デバイスを二個所持していたんですか？」

紅「ああ、そうだが？」

ユ「ですがデバイスは今、説明をしていたと言っていました。ということはまだ戦いをしたことがないということですよ？」

紅「そうだな。確かにそうだがどうした？」

ユ「ということは、なのはより強いというのはまだ分かりませんか？いくら魔力がなくても、扱えなくては意味がありませんが？」

そう言われ、軽く頭にきた。

俺はユーノに軽く殺気をとばしながら

紅「ほう？ではなのはと勝負をしてやろう？こい、なのは」

俺はそう言って黒刀を構えてなのはと向き合った。

な「ええ！？そんなあゝ・・・しょうがないか、いくよ、レイジン
グハート！！セットアップ」

レ（セットアップ！！）

なのはが桃色の光に包まれていき、その光が収まったときにはそこに白を基準としたバリアジャケットを纏ったなのはがいた。

な「準備完了！いつでもいけるよ」

という返事が返ってきた。

紅「よし、じゃあいくか！黒刀、魔力50%圧縮開始！」

黒（イエス、マイマスター！。魔力圧縮開始・・・・・・・・完了。魔力刃を形成します。）

すると黒刀の刃全体を覆う深い青色の魔力刃が形成された。

紅「しっかり避けるよ？なのは」

な「え？」

なのはがそういった時には紅はなのはの視界から消えていた。

レ（プロテクション）

ガキイイイン

レイジングハートに搭載されているオート防御機能が作動したのは
を守った。だが相手が悪かった。

紅「甘い！」

そう言われなのはプロテクションをみて、驚愕に顔を染めた。その
視線の先には、プロテクションが真つ二つに切り裂かれ黒刀を首
に突きつけている紅がいた。

約束（後書き）

黒刀も強ええ！

そして、見てくれている皆さん、ありがとうございます。
これからもがんばっていききたいです。

終わって（前書き）

見てくれた人が、1000人越えてびっくりしました。見てくれた人、ありがとうございます。こんな駄文を読んでもくれて

終わって

紅「さて、どうする？なのは？」

な「こ、降参します。」

そういつて、なのはは両手を挙げた。と、そこへ

ユ「なのは！」

そういつて、ユーノが近づいてきた。

そして

ユ「彼方は何者なんですか？なのはは魔法を覚えてまだ数日しか経っていないけど、ついさっき、しかもデバイスも初めて扱っているはずなのに、もう、使いこなしている。しかも少しは経験を積んでいるなのはに勝ってしまった。普通そんなことはありえない。彼方は本当に何者なんですか？」

そういつて、こっちを睨んできた。

俺はため息をつきながら答えた。

紅「ハァー、俺は暁　紅。なのはの友達で、同じ魔法使いだ。（チートだけどな）」

そういうと、ユーノは複雑そうな顔をして

ユ「そうですか。まあいいです。これからよろしくお願いします。」

な「よ、よろしくお願いします。」

紅「ちょっと待て、なんで俺が何か手伝うことになってるんだ？」

な「だめ？（ウルウル＋涙目）」

紅「わ、わかったよ！」

くつそー。これじゃあ、断れない。

そして家に帰ることになり、帰ろうとしたら、なのはが腕に抱きついてきて

な「うちで、ケーキたべってっ？」

紅「キミハ、ナニヲイツ テイルンデルカ？」

な「だめ？（ウルウル＋涙目）」

紅「分かった、分かったからやめてくれ。（俺の理性が）」

そうして俺は翠屋に行くことになったのであった……あれ？
これシスコンとの決闘フラグ？

そしてなのはとのフラグ立てた!?

終わって(後書き)

フェイトにも立てようかなあ・・・

結局こつなる（前書き）

簿記がむずい

そしてなかなか話が思いつかない。

でも、学校も小説を書くのも楽しい。

いまも読んでいてくれる人、ありがとございます

結局こうなる

さてさて、前回死刑宣告された暁　紅です。

え？　いつされたかつて？

そんなの、なのはが家でケーキを食べてってと言った時からさ！！
誰に殺されるかは、皆さんのご想像にお任せします。あってるから。

さて、こんな現実逃避はほどにして、今何処にいるかというところ、翠屋の前ですよ！

さあ、死刑台（店内）に入ろうではないか！！来い！俺は生き残ってやる！！

な「ここが家だよ！入って入って」

そう言っ、翠屋の扉を開けるのは。

士「お帰りなのは……………誰だそいつは？うちの娘はやらん……………
ぐは！」

桃「おかえりなのは。ごめんなさい？うちの主人が迷惑かけて？彼方のお名前は？」

おお〜リアルの高町士郎と高町桃子さんだ〜

てか士郎さん。なのはと店に入っただけでこれか、かなりすげーな？ってか恭也もこれと同じレベルか？きついな

紅「突然お邪魔してすみません。僕はなのはの友達の暁 紅です。」

と礼儀正しく自己紹介した。理由？そんなの、好印象与えるためにきまつてんじゃない？

桃「あら、丁寧にありがとう。なのは、いい子手に入れたわね？お母さん嬉しいわ〜。しっかりとものにするのよ？良い？あとでゴニョゴニョ・・・」

桃子さんがなのはに何か話したかと思っただけなのはが

な「ええ〜そんなことでもいいの？・・・わかった。やってみるね／＼／＼」

と顔を赤くして頷いていた。どうしたんだ？

すると、後ろから殺気が！？恐る恐る振り向いてみると、そこには桃子さんにより気を失っていた士郎さんがこっちを睨んで

士「なのはは・・・渡さん、絶対に渡さんぞおおおおお！」

と怒り狂っている士郎さんがいらっしやいました。

紅「いや、別になのはを貰いに来たのではないのですが？」

すると士郎さんが血走った目で

士「なに！？君はなのはには何も感じんと言うのか！？許せん！！
覚悟おおおあああああああああ！！？」

何を勘違いしたんか知らんが士郎さんが襲い掛かってきたが、桃子さんがそれを阻止し、そのまま引きずって行き、その後、悲鳴が聞こえてきた。桃子さん、怖い！！

そのまま、硬直していたらなのはが、こんな提案をしてくれた。

な「紅くん、今日、うちに泊まっていく？」

紅「ナニヲオツシャツテイルンデスカ？メイワクニナルダケデスカ
ラヤメテオキマス」

といって断ったら

桃「大丈夫よ、問題ないわ」

という許可が下りてしまった。しかもなのはが泣きそうになりながらこつちを見ており、しかもそのなのはの様子を感じとった土郎さんがこつちを血走った目で睨んできている。

ここで皆さんに問題です。ここまでの状況で俺に拒否権が残っていると思う人いますか？

いませんよね（涙）

結局、泊まることになりました。

o
r
z

結局こうなる（後書き）

近いうちに、デバイスの細かい設定を書いたやつ出そうとおもっています

楽しみに待っていてください。

詳細なデバイス設定（前書き）

とことんしっかりと書きました。

では、どうぞー！

詳細なデバイス設定

メサイアG

バリアアーマーデザイン マクロスFVF-25G（ミシエル機）

武器 通常はライフル、頭頂部レーザー機銃、シールドに収納されているナイフ

ロングレンジパック装備時はこれに追尾型実弾ミサイルが追加される。

また、ライフルとVF-25F（アルト機）と同型の銃に変換可能。

また、デバイスであるから、ほかの魔法、スフィアなどの展開、操作が可能。

ライフル、銃の説明

ライフル、銃の弾丸は使用者の魔力を圧縮し、それを弾とする。使用者からの指示で魔力の圧縮率は操作可能。最大圧縮をすると、19歳のなのは（Striker S時）の本気で張るプロテクションをやすやす貫く。

魔力20%圧縮で無印編のなのはのプロテクションを貫ける。最大圧縮は切り札ともいえる。ライフルの弾の最大飛距離は50kmでたとえ見えないくらい遠くにいてもスコープを覗きながら狙えば外すことはない。照準はメサイアGが自動補正してくれる。ライフルの欠点は弾の連射があまりできないのと、本体自体が長く、懐に入られると対処ができない所。

その点銃は連射ができ、しかも魔力圧縮率が低下しない所が利点といえる。これは飛行形態のファイター形態の時も同じである。ファイター形態のとき、ライフルをマウントするよりも、連射のきく銃

をマウントする方が得策である。本文の中では今のところ、武器の使用、説明はライフルしか行っていないが、これから出していく所存である。ガウオーク形態のときにも銃の方が得策といえよう。バトロイド形態では、どちらでも得策ではあるが、主に使用するのは銃であろう。頭頂部レーザー機銃は弾が50%圧縮された魔力である。これは、追加装備を装備すれば、威力が上がるが後に記載する。シールドに収納されているナイフはシールドから出された瞬間に刃に多数の小さな魔力刃を形成し（チェインソーの刃のように展開される）、それが高速回転し、対象を切り裂く。

ロングレンジバック装備時は武器の威力が全体的に上がっている。ライフルの弾丸も通常時より大幅に上がり、魔力圧縮率の指示無しで撃つても、通常の魔力圧縮率の最大値（100%）を軽く上回り、この装備をつけての狙撃は敵を一撃で葬り去る無敵の狙撃とも言えよう。しかも弾速が格段に上がり、秒速50km、一言でいえば、撃つてから一秒後には、敵に着弾しているのである。さらにデバイスの補助機能もあがっており、もはや弾を外す要素がないという高スペックである。銃の魔力圧縮率も上がっており、その圧縮率はライフルには劣るが、通常の最大圧縮率と同じであり、文句はない。頭頂部レーザー機銃も圧縮率が上がり、通常の圧縮率と同じだけの圧縮率である。ナイフの魔力刃の圧縮率もあがり、ほとんどのものが切れるようになる。

ミサイルは実弾型追尾型のと、魔力で構成された追尾型があり、両方とも使用者とデバイスの補助により、敵にロックされ発射される。実弾のミサイルも魔力で構成されたミサイルもAMFでも使用できる。魔力構成のほうは、使用者の命令で飛行途中で分裂し散弾のようにはなるが、威力は変わらない。この機能は広範囲の殲滅にかなり有効である。

さらに、もう一つの装備がメサイアGには搭載されており、それはAVF-25（ルカ機）の相棒の無人機の専用ゴーストと同型のゴースト3機を召喚し、それを操るという能力がある。そのゴーストには、3つのリミッターが掛かっており、3つ目を解除すると、ユタシステム（マクロスF本編の最後にルカが解除した最凶のシステム）がリリースされ、そのすべての能力が最大値を超える動きができるようになる。違うところは、カラーリングが青色ということである。

ちなみに飛行するとき、燃料として使用者の魔力を消費する

また、紅からはメサイアとよばれている。

待機状態のときは青色の飛行機型のキーホルダー

黒刀

バリアジャケットデザイン 漆黒の長袖、長ズボン、そして
明るい青色の縁取りがされている漆 黒のマント

武器 漆黒の刀

能力 その剣身に魔力を圧縮することで、魔力刃を刃の表面に形成し、圧縮率が上がるにつれて、切れ味もましていくというもの。その剣身は常に最高の状態を保持しており、手入れをしなくてもよい。そして魔力圧縮率の指示なく、魔力刃を形成した場合、圧縮率は20%で無印のなのはのプロテクションを切れるくらいで、最大圧縮でなんだろうが、まるで豆腐のように切れる。たとえばデバイスでも切れる。その剣身に展開されている魔力刃を斬撃として、飛ばすことができる。

待機状態のときは黒いブレスレット

詳細なデバイス設定（後書き）

やっと書けた

お泊り（前書き）

ユニークアクセスが30000超えそう！
うれしいです！

お泊り

さて、今日、高町家に泊まることになってしまった紅です。

ぶっちゃんけ士郎さんと恭也さんがとても恐ろしいです。

なぜか？

その答えはこの回想を見てください。では、どうぞ！！

美「へえ〜。てことは紅くんは、なのはとは公園で知りあったんだ」
な「そうだよ〜公園に行ってみたら、紅君が草原に倒れててびっく
りしたんだよ〜」

紅「そういえば、なのはと会ったのってそのときだったな」

今、高町家の人々と絶賛お食事中です。

当然この二人は

士「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

恭「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でこつちを睨んできております。怖い！！

紅「あの・・・士郎さん？恭也さん？」

すると二人が突然立ち上がり

士、恭「道場に来い！！」

そういつて、出て行ってしまった。

その反応に3人は

桃「あらあら」

美「キレちゃった」

な「どうしたんだろう?」

・・・・一人現状把握をしきれてないのがいたね!!
つかやっぱり決闘フラグたってたか・・・めんどいな

道場

恭「さあ!これを使え!さあ、構えろ、成敗してくれる!」

そういつて、木刀を一本投げ渡された。

紅「なぜこうなったかを簡単に説明してもらえますか？」

という疑問を言ってみた。まあ、分かってるんだけどね！！

恭「それは、君が、なのはを・・・なのはを取ろうとしているからだ」

きた！激しい勘違い！！さて、どうやって解決しようかな？

そう思いながらも恭也の攻撃を寸前で見切って回避してる。正直、早いね！神からチート能力もらってなかったらどうなっていたことか・・・考えただけでもゾツとする。

しばらく避けていると

恭「どうした？避けるだけでは、俺に勝てんぞ！！」

紅「そうですね。では終わらせましょう。」

そういつて俺は数メートル下がり、一気に恭也の懷に飛び込み、一閃。

恭「！！」

恭也は反応しきれずに、ふっとばされていった。

すると士郎さんが、

士「すばらしい動きだね？なにかやっていたのかな？でもやっていたとしても今の動きはできない。君は一体何者なんだい？」

またその質問が来たので

紅「おれは暁 紅。なのはの友達ですよ。」

こう返した。

士「そうか、いや、すまなかつたな？突然」

紅「いえ、良いですよ。では戻りましょう」

士「そうだな」

こうして紅と士郎はもどっていった。恭也を置いて……

恭「置いていかないでくれ」

哀れ

この後、なのはの質問で「学校に来るの？」という質問で

心で神にお願いした。

え？何をつて？そんなの、学校への転入届けだよ？

そうして、なんだかんだで寝ることになり、なのはに寝る場所の確

認を行うと

な「紅君の寝るところはここだよ」

そういつてベットを指差すなのは。

紅「じゃあ、なのはの寝るとは？」

な「ここだよ／＼／」

そういつて同じベットを指差すなのは。

紅「ナニヲイツテイルンデスカ？ ナノハサン？ オレハオトコデスヨ
？ イイワケナイデシヨ？」

そういうとまた

な「だめ？（ウルウル）」

紅「分かった！一緒に寝るからやめて！」

結局一緒に寝ることになった。

ユーノ？ ずつとなのはの部屋で寝てたよ？

お泊り（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

作者の悩みは学校でケータイがiphoneなのは作者だけかもしれないことです

お仕置き(前書き)

やべえ

ユニーク3000を超えた

お仕置き

やあ！昨日、高町家にお泊りしました紅です。

いやゝ寝るときは焦ったね！寝相でなのはが抱きついてきてさゝ理性が崩壊寸前になっちまってよゝ

ほんとやばかった！

さて、今は

紅「なぜに？」

な「うふふふ、紅くゝん」

なんとも幸せそうに俺の名を呼んで腕に抱きついていてるのはだつた。

紅「さて、どうしようか？」

さすがにこのままはだめだなゝ。しかもこれを恭也さんが、土郎さんにでも見つかったら、あの世送りになるんだろっしなゝ早いとこ起すかな？

そんなことを考えて、なのはを起しにかかる。

紅「なのはゝ起きろゝ朝だぞゝ」

そういいながら、なのはの肩を掴んで揺らす。不覚にも肩が細いと思ってしまった。子供なんだから当たり前前ジャン！！

な「ううゝん。あと5分寝させてゝ」

紅「確かに今日は日曜だけど、いつまでも寝てていいわけないですよ？」

な「わかったよゝ」

するとなのは目を擦りながら起き上がり、着替えだしたって

紅「まで、なのは！！今着替えるのはまずい！」

すると意識が覚醒したみたいで

な「あれ？なんで着替えようとして？」

そう言いながら俺の方を向く。当然着替えてる途中であり、当然、俺の目には、なのはの下着が見えてしまう。そんな状況で女の子が取る行動はただ一つ！！

な「きゃあああああああああああああああああああああああ
ああああ」

悲鳴を上げるとのことだよ！！

さて今の状況を説明いたしますと、俺は縄で縛られ、正座しております。

その目の前には鬼のような面相をした土郎さんと恭也さんが俺を睨んでおり、そこから１メートル離れたところに、なのはが顔を赤らめて座っております。めっちゃかわいいと思います。

土「なぜなのはの着替えを見た？」

とても低い声音で聞いてきた。殺気も放っています。怖い！！

紅「いえ、なのはを起したらいきなり脱ぎだして、声を掛けたら正気に戻り、俺の方を見て、数秒硬直しその後、悲鳴を上げられてしまったというもので、正確には俺のせいではなくなのはのせいなのではないのですが？」

すると士郎さんは少したじろぎ、そして

士「ええい！たえなのは不注意でも貴様はなのはの着替えを見た！私でも見たことないのに！」

などと理不尽なことを言う士郎さん。正直あきれる。

しばらく士郎さんの説教を聴いていると、士郎さんの後ろから桃子さんが近づいていき、そして

桃「えい！」

なんとも似合っている掛け声とともに、士郎さんと恭也さんの後頭にチョップをかました。

だが、そのチョップの当たった音は　ゴスッ！　というなんとも似合わないような音だった。

しかもいまの一撃で二人とも気絶してるし！桃子さんつええ！絶対怒らせないようにしなくては

桃「うちの主人と息子が迷惑かけたわね。あとなのはも」

そう言うってから、気絶した士郎さんと恭也さんを引きずっていった。

すると部屋には、俺となのはしか居なくなる。

な「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紅「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が続いていた。とても居ずらい。早くおいとましたい。
そうしているとなのはが沈黙を破った。

な「ねえ、紅君、もし私に貰い手居なかったら結婚して？」

こんなときいてきた。

紅「いや、絶対なのはには貰い手いるって」

そう返した。絶対いるでしょ？美人になるんだから？

な「だめ？（涙目＋上目使い）」

俺の理性に10000000000000000のダメージがきた！

紅「わかった。結婚する。」

するとなのはすごい笑顔になって、

な「ありがとう。えへへ、約束だよ！」

といてくれた。

やっぱり癒される～

え？士郎さんと恭也さん？

さっきから隣の部屋から悲鳴が聞こえるけど、知らないよ？

お仕置き（後書き）

いきなりですけど、作者はガンダムが結構好きです。
とてもきにいつてるのが、この機体達です

クロスボーンガンダム

フリーダムガンダム

インフィニットジャスティスガンダム

H i - ガンダム

デステニーガンダム

レイダーガンダム

ガイアガンダム

その後（前書き）

書く前に不思議探偵団途中まで見た。メッサ怖かった。

その後

今いる所は、公園だよ！今から結界張ってメサイアからの説明聴こうとおもってさ。

え？なのは？なのはならすぐ近くで見てるよ？肩にユーノを乗せてるけどね

メ（ではマスター、これから、ロングレンジパックおよび、ほかの性能についての説明をします。まず、ロングレンジパックは、装備時、各武器の性能が上がります。なぜか、スナイパーライフルの弾の飛距離だけは変わりませんが、弾速は速くなっています。それに魔力弾の圧縮率が通常のとくに例えるなら限界値の100%の状態が普通となり、これ以上の圧縮が可能となっています。それと実体弾のミサイルと魔力のミサイルが撃てるようになります。もちろん追尾型です。それとシールド内部に収納されているナイフですが、黒刀と同じような構造です。さしずめ、ナイフ型の黒刀だと思ってください。

それと、スナイパーライフルは、普通の銃、といってもVF-25Fの銃ですけどね？それと交換できます。圧縮率も変えられます。連射がスナイパーライフル時とは比べ物にならないくらい速く、圧縮率も変わりません。それと、シホン、ヨハネ、ペテロンと命名されているゴーストと呼ばれる機体3機を呼び出せます。この3機はそれぞれリミッターが5段階かけられています。あとでどのようなものなのか表示します。それとファイター形態の時、単体での次元

航行が可能です。あと頭頂部についているレーザー機銃ですが、魔力圧縮率は50%です。ロングレンジパック装備時には、100%にまで上がります。私からは以上です。マスター」

紅「ありがとう、メサイア。よく分かった。だがそうすると、黒刀が短いのと長いのが、二つになるのか？まあ良い。」

ユ「一つ、聞いても良いですか？」

紅「良いがどうした？」

ユ「彼方のデバイスは何なのですか？あんな高性能なデバイスは見たことも聞いたこともない。異常です。」

紅「うーん答えても良いけど、俺のことも話さなきゃならないし、それに、信じてもらえないだろうけど、聞く？」

ユ「お願いします」

な「私は、紅君の言うこと絶対信じるよ！」

なのはよ、うれしいが間違ってるぞ？

そして、俺は俺がこの世界の住人ではない事、どうやってきたか、このデバイスが何なのかを打ち明けた。

ユ「てことは、そのデバイスは神の作ったデバイスってことですか？すごい、道理で高性能なワケだ」

な「そうだったんだ。てことは、紅君学校いなくてもいいんじゃない？」

紅「うん。でも、神に頼んでいれてもらった。」

するとやっぱりなのはが驚いた。

な「ええ、神様にそんなこと頼んでいいの？でも、なんで？」

紅「もう一度、学校に通ってみるのも悪くないと思ってね？」

こんなたわいもないことしゃべりながら遊んでた。

さて、明日は学校だ

その後（後書き）

よんでくれてありがとう

学校（前書き）

テストが近くなってきました。
更新おそくなるかも？

学校

さて、今学校です。いや、やっぱり転校ってことになっててな？先生からいろいろ聞かれたよ。でもまあ良い先生だ。さて今からクラスに入ります。

暁 紅、いつきまゝす！

紅「はじめまして、暁 紅です。皆さん、仲良くしてください。」
そういつてから頭を下げ、クラスを見渡す。すると見知った顔の奴が顔を驚愕に染めてから念話で話しかけてきた。
な（紅君、同じクラスだったの〜？）

紅（知るか！今始めて分かったわ！！）

そんな会話をしているうちに話は進み、席はなのはの隣になった。
もちろん、アリサやすずかもいたよ？

この後の展開は分かっているとは思いますがお伝えします。

まず、ほかの生徒からの質問攻め。正直、辛かった。フェイトもこれを経験するのか？がんばれ！

そしてアリサの介入があつて、今は昼休みです。

紅「さて、弁当をたべるかな」

さあ、今日の弁当はもちろん俺の手作り弁当です。悲しくはないよ？

さあ、弁当を今開けるその時、やっぱり邪魔する人がきました。

な「紅君、一緒に食べよ?」

どうせ拒否権はないので

紅「ご一緒させていただきます。」

そういつてついていった。もちろん、アリサとずかずかつき。そして俺には男子生徒からの嫉妬の視線がグサグサ刺さっております。

場所は屋上、みんなで弁当を食しております。

ア「あんたって、なのはと知り合いなの?」

紅「うん、そうだけど、どうしたんだ?」

す「どうやって知り合ったの?」

な「紅君が公園で寝てる所に私が話しかけたの」

こんな会話をしていたらアリサが

ア「結局、偶然知り合ったのね?」

な「そうだね」

紅「そうだね」ってお前なあ。まあいいや。改めてよろしくバニン

クス、月村」

ア「アリサで良いわよ？ていうかアリサと呼びなさい。」

す「私も、すずかで良いよ？」

紅「分かったよ、アリサ、すずか」

こう言つてとりあえず笑つとく。すると、アリサもすずかも頬を赤らめてしまった。しかも隣から不機嫌オーラが漂つてきている。

そして、下校

ア「じゃあね」

す「またね」

な「じゃあね」

紅「また明日」

こういつてアリサとすずかとわかれた。

なぜってそれは俺のうち、翠屋の隣だよ？

こうして、学校初日は終わった

学校（後書き）

読んでくれてありがとう。

いきなりですみませんが言わせてください。

私はフリーダムガンダム大好きです。もちろんストライクフリーダムも好きです。

次にジャスティス、インフィニットジャスティスです。

そういえば皆さん、ガンダム無双って知っていますか？

あれのストフリや ジャスティス、デステニーガンダムの出撃が
とてもかっこいいんです。やばかった。

日常2（前書き）

なんかつまらないのになりそう・・・？

日常2

朝六時、いつもどおりに起きた。
そして、俺の朝は始まる。

まず、着替え、朝飯を食べ、歯を磨き、公園に行く。そして結界を張る。あ、もちろんなのはやユーノには言っているので来ないです。

そしてメサイアを起動させ

紅「セットアップ」

メ（セットアップ！）

そうしてB Aを纏い、足に力を込める。すると、俺の体が浮き上がる。そうやってしばらく飛行し体をならす。そしてファイター形態になり、一瞬で空高く飛び上がり、しばらく飛び続け、慣らしてから、地上に降り、かなり遠くにスフィアを形成させ、動かす、そして右手にスナイパーライフルを出現させ、弾をリロードして、構える。すると、ライフルのスタビライザーフィン、光学射撃サイトが立ち上がる。そしてスコープも稼動して現れる。そしてスコープを

覗き、動いているスフィアに狙いを定める。

このとき、俺がスフィアを制御するとどう動くのか分かってしまうので、メサイアに動かしてもらっている。そして30分ほど、射撃練習を続け、BAを解除する。そして今度は黒刀を起動させBJを展開させ、黒刀を鞘から抜き放ち、正面に構え、目を閉じ、神経を鎮めてから、ゆっくり素振りをして、どんどん速くやっていく。そして、魔力で作ったゴーレム作り、黒刀に動かしてもらいながら、それを相手に黒刀を振るう。そしてそれを7時まで続けて家に帰る。そして学校に行く準備をして暇をつぶしているとチャイムが鳴った。

紅「はい、どちらさまですか？」

きたのはもちろん

な「一緒に学校いこ！」

なのはであつた。

もちろん了承し、並んで学校に行く、校門のところでアリサとすずかと会い、そのまま教室へ。

もちろん、男子生徒の嫉妬の念を貰いながら。3人は気づいてない。

そのあと、授業は滞りなく進み、昼休み、昨日と同じようになのは達と昼食と取り、他愛もない話をして過ごし、午後の授業をうけ、なのはと家に帰り、朝と同じ鍛錬をしてから飯を買いに行き、飯を食う。

そしてメサイア達の説明を聞き、寝る。

これがほんとこの俺の日常だ！

日常2（後書き）

つまらなかったと思います。

反省（前書き）

感想で、ご注意を受けました。小説をよんでくれている人には申し訳ありませんでした。これからは、そのことに気をつけてかいていきたいと思います

反省

今日は待ちに待った翠屋FCの試合があります。

なぜ観戦に来たのかは、なのはに誘われてです。はい。

まあ、そんなこと置いといて、試合観戦しましょう。

しっかりと見ようと思ったらユーのから念話が来た。

ユ（紅、これはスポーツ？）

紅（ああ、そうだがユーノは知らないのか？）

ユ（うん。でもこれに似たスポーツはあったよ。）

紅（そうなのか？まあ良い、それよりも、試合観戦に集中しよう）

こういつて、念話を中断して、試合観戦をする。

しかし、こうやってのんびりするの悪くないな。

すると

ピピ―！

ホイッスルが鳴り、前半戦が終了した。

だが、様子がおかしくないか？そんなことを思っていると

な「あれ？こっちに来るよ？」

ア「ホントだ」

す「なんで？」

紅「俺は嫌な予感しかしない。」

そういつている内にこっちに来た二人は

「なあ、試合に参加してくれないか？」

「一人怪我をして出られなくなっちゃって、人数が足りないんだ。
頼む！」

なるほど、さっきの様子がおかしかったのは怪我をしちまって、ど

うするの悩んでいたからか。

紅「なのは、どうしたらいいと思う？」

ア「どうしたらってアンタ・・・」

な「わたしは行ったほうが良いと思うよ！」

す「わたしも」

そうか、悪い予感当たったな

紅「分かった、やるよ。でも、俺はサッカーのルールを知らないから、教えてくれ」

するとその二人はすぐに了承してくれた。

「分かった。今から教えるよ。」

「こっちに来てくれ、ユニフォームを貸すよ」

こうして、なんだかんだやっている内に試合が始まった。

最初、2点先制されてしまったが、ほかのみんなが踏ん張り、いまは同点となっている。

な、ア、す「「がんばれ」「」

みんなで応援してくれてる。ちなみにユーノは念話で応援してくれた。もちろん、応援されているのががんばらないのは男が廃る！なので

紅「本気で行かせて貰う」

もちろん、手加減してやるよ？

こうして、俺が2点いれて、試合は翠屋FCの勝利に終わった。この後、俺はかなり疲れていたので、家に直行した。

だが、俺は気づくべきだった。ジェルシードに……………

なのはサイド

ア、す「またね」

あの後、アリサちゃんとすずかちゃんとでケーキを食べて寛いでいました。紅君もくればよかったのに

な「さて、ユーノくとあそぼ!」

これからユーノくと何して遊ぼうか考えていた時にそれは起こりました。

ユ「なのは、ジェルシードが発動したよ!」

ユーノくんが飛び出てきました。

な「うん。わかってる。すぐ行こう!」

すぐに、現場に向かいました。

現場につくと、町が凄いことになっていました。

な「酷い・・・もしかして、私のせい？」

思わず、そう呟いてしまった。

すると、ユーノくんが顔をあげて

ユ「どうしたの？なのは？」

心配してくれていた。でも私は別のことを考えていた。

それは

私が、勘違いだと思ったせいだ。私の不注意が起してしまった。

こう、考えてしまいました。

すると、ユーノくんが、

ユ「なにしてるのなのは！早く封印を！」

そう言われて気が付きました。いまはそんなことを考えてる時じゃない！早く封印しなきゃ！

そう思い、必死に魔法をつかって探し出し、見事にジェルシードを封印できました。そしてある決意が私の中で起こりました。

な「ユーノくん」

ユ「なんだい？なの？」

な「私、ジェルシード探し、これからも続けるよ!」

ユ「でも、それではなのはに迷惑が・・・」

でも、わたしの決意は揺らぎません。だって

な「大丈夫だよ!だって、私より断然強い紅君も居るんだよ?それに、これは、私の決めたことだから、心配しなくて良いよ?」

すると、ユーノくんは俯いて小さく

ユ「ありがとう。本当に、ありがとう」

そう、何度も呟いていました。

よし、これからがんばるぞ

このころ、紅は

紅「ううん」

寝ていた。

反省（後書き）

どうでしたか？

直っていましたでしょうか？

感想待ってます。

決意

昨日、サッカーをやって疲れた俺は早々に布団に入り、グッスリと眠っていた。

紅「ううゝん」

メ（よく寝ていますね）

黒（確かに。でもマスターはあまり疲れないんじゃないか？・・・！！）

次の瞬間メサイアと黒刀はジェルシードの発動を感じ取っていたが・・・

メ（これは・・・？ジェルシードが発動しています。マスター、起きてください！！）

紅「ううゝん」

だが、紅は寝返りをうつただけだった。

メ（マスター！早くしないと……？これは、なのは嬢と……
・ユーノ殿？）

黒（彼らに任せたほうが良いのでは？）

そうですね、マスターも寝ているのですから、良いですよね？

メ（そうしましょう。どうか、彼らが無事にやってくれることを願
って……）

こうして、私と黒刀はスリープモードに入りました。どうか御気を
つけて！

翌日

紅「ううん、よく寝たつと！・・・あれ？そっぴや昨日、飯と風呂はいつたっけ？メサイア？」

メ（マスターは昨日、家に帰ってすぐに睡眠を取られておりましたが、途中で我々がジェルシードの発動を確認しました。）

なに？そっぴや昨日だったのか！すっかり忘れていた！！

紅「で、誰が封印した？」

メ（なのは嬢です。ちなみにマスターにはお声を掛けましたが、疲労が溜まっていたらしく、うなってまた寝てしまいました。）

えゝ俺二度寝したのか！暢気だな俺

まあ良い！とりあえず、シャワー浴びて、飯食って、そんでもって歯を磨き、学校に行く途中になのはに謝ろう。うん、そうしよう。

さて、準備は整った、さあ、いざ学校へ行こう！

そしてドアを開けると

ゴンッ！

なんか鈍い音鳴らなかったか？

ドアを全開にしてみると、

な「イッターイ」

額をおさえて喚いているのはでした。

さて、今はなのはと一緒に登校しているのだが、一言も喋っていない。正直、気まずいです。

な「あの、紅君、なんで、昨日来なかったの？」

沈黙を破ったのはなのはだった。

紅「ああ、それはな、俺家に帰ったらすぐに寝ちまってな、ジェルシードの発動に気が付かなかったんだよ」

するとなのははびっくりとした表情で

な「そうだったの？でもデバイスが起してくれたんじゃないの？」

紅「それが、起してくれたらしいんだが、呻いただけで起きなかったらしい。」

なのははホッとした様子で

な「よかった。なにかあったんだと思っちゃってて」

なんだ、心配してくれてたのか

俺はなのはの頭を撫でながら言った

紅「事故なんかにはあってないよ？でも、心配してくれて、ありが

とうな？」

な「／／／／／」

なのは顔を赤らめながら、撫でられている。可愛いな・・・

紅「さて、こんなことしないで学校行くぞ？」

そう言うってから撫でるのを止める。

するとなのはは残念そうな顔をしていた。俺は何も見えてはいない。

ちなみに、この事がアリサ達にばれ、撫でることになったのは別のお話

授業中にふと

フェイトに会うのっていつだったけ？

と思いました。

そして放課後・・・

な「紅君、一緒にすずかちゃんのお家に行こう！」

お誘いを受けました。そういえばこの時だったな、フェイトに会ったのって

もちろん

紅「よろこんで、一緒に行かせてもらっよ」

スマイル追加で返すか

ニコッ

な、ア、す「「「「／／／／」

三人共が頬を赤らめていた。やらない方が良かったか？

こんなことを思いながら、なのは達に付いて行った。

決意（後書き）

次回、月村家に突入です！！

遭遇（前書き）

感想待ってます

遭遇

ただ今月村家でお茶会しております。まあ、正座なんてしてないけどね？

ア「相変わらず、此处は猫天国ね？」

紅「アリサ、それには同感だ。」

な「にやははは。そうだね」

三人して言う

す「うん、でも、飼い主が決まった子も居るから、お別れしちゃうんだよ」

紅「そうだったのか？なら、今の内にいっぱい遊んどかないとな」

そういえば、こんなことがあったな。

たしかこの後だったか？フェイトが現れるのって

すると、視界の隅で、茂みの中へ消える子猫を見た。

紅「もうそろそろか？」

す「？どうしたの？」

やべー！声に出してたか！！

数分後

俺は、ジェルシードの発動を確認した、横目でなのはに念話で

紅（行つて来い。後で俺も行く）

な（うん！お願い！）

そう言つとユーノに念話で

な（ユーノくん、ジェルシードのどこまで案内して、すずかちゃん達には、逃げてるように！）

ユ（わかった。こつちだよ！）

ユーノは直ぐにジェルシードの方へ駆けていき、その後を追いながらなのはは

な「ユーノくんが逃げちゃったから捕まえに行つて来るね！」

元気に飛び出して行つた。あいつ、楽しんでないか？

紅「俺も行つて来る」

そう言つて椅子から立ち上がり追う

後ろでするか達がなにか言ってるけど無視した。

なのはサイド

いま、走ってユーノくんを追いかけてるの。ユーノくん、早いのに、なんとかユーノくんに追いつけたの。でも、今はそんなことよりもこっちの方が重大なの

それは灰色の毛に黒い縦縞の入ったおっきなネコさんが居たから。

な「ふえええええ！？なにこれ？」

ユーノくんに質問したら、顔を引き攣らせて

ユ「猫の大きくなりたいという願いが正確に叶ったんだと思う」

な「り、立派な夢、だね？」

さすがに、呆然とするしかなかった。

少しして、突然、黄色い何かが飛んできて、猫に当たった。

紅サイド

ただいま、なのはとユーノの魔力反応を追っている。もうそろそろで着くな。こんなことを思っていると、魔力反応が二つ増えた。いよいよフェイトが来たか！さてこんなことを考えてないでやるか！

紅「メサイア、セットアップ！！」

メ（オールライト、セットアップ！！）

そして俺はVF-25Gになり、足に魔力を送る。そして、俺は大空に舞い上がり、スナイパーライフルの弾をリロードする。するとスタビライザーフィン、光学射撃サイトが展開する。それと同時にスコープが稼動し現れる。それを覗くと、丁度、フェイトがなのはの元に現れ、攻撃しようとしているところだった。

「チッ」

と舌打ちして、スコープの倍率を上げ、再度覗く。すると、フェイトのバルディッシュの掴み方が分かる位に拡大されていた。直ぐにその掴んでいる所に向かって数発撃つ。

弾は命中して、バルディッシュが弾き飛ばされ、フェイトは何が起ったのか状況を飲み込めていなかった。そして、フェイトに向かって、バインド弾を撃つ。この弾は、着弾した所にバインドをするという弾でそれを、フェイトと呆然としているアルフの四肢に撃つ。

バチィッ

という音とともにフェイトとアルフにバインドが掛かった。二人とも状況が分からず、呆然となっていた。

なのはサイド

いきなり、金髪の綺麗な子が猫ちゃんに攻撃をして倒しちゃったの

！しかも、ジェルシードを渡せって言うて襲い掛かってきて私は目を瞑ってしまった。そして、その子がデバイスで攻撃をすると分かったとき、

ドンッ

って音が聞こえた。恐る恐る目を開けると、その子のデバイスが無くなっていた。なんで？って思ってたなら、

バチィッ

って音がして、その子と近くにいた犬？にバインドが掛けられた。しかも、そのバインドの色は青色。
ってことは……

紅「よう、おまたせ、なのは」

やっぱり、紅君だったの

紅サイド

いや〜うまくいってよかったよかった。バインド掛からなかったらどうしようかとおもったよ？まあ良いけど

ユ「紅、今の弾は何なの？」

ユーノが質問してきた。そういや、話してなかったな。

紅「あれは、バインド弾。着弾した所にバインドを掛けるってやつでな。術式の圧縮に苦労した。」

ほんとに苦労した。暴発して、俺にバインド掛かったりしたし。

？「あの！私達をどうするつもりですか？」

あつ！フェイトのこと忘れてた。

紅「なのは、お前がきめろ」

な「いいの？」

こいつ、目が輝いてやがる。相当話たかったんだな

な「じゃあ、彼方のお名前は？」

やっぱり聞いたな

フ「フェイト」

素直に答えたな。コッチを睨んでるけど。まあ、MA着てるし、ばれんだろう。

な「じゃあ、なんでフェイトちゃんはジェルシードを集めてるの？」

またなのはが質問した。

フ「それは……」

フェイトが言う瞬間、

？「言わなくて良い！」

犬？が叫んだ。

フ「アルフ……」

ア「こんな奴になんか話さなくて良い！」

そういうと、無理やりバインド引きちぎって、フェイトを連れて逃げていった。

バインドが弱かったか、改良しなきゃな。

紅「なのは、俺は帰るぞ？アリサ達によろしく言っといて？」

俺はなのはに伝言を頼み、ファイター形態になって、飛び去った。

なのはは

な「ええ〜」

叫んでいた

この後、アリサ達に、なのはがこっぴどくしぼられたのは言うまでもない

遭遇（後書き）

がんばってます。

それと、another century's episode
て知ってますか？実は、あれの最新作がプレステ3で出るんですよ。
タイトルは見てのお楽しみです。ではまた！！

旅行（前書き）

がんばります

旅行

あのあと、なのははずかそとアリサに、俺が先に帰って行ったという話を、話しておいてくれと頼んでおいた。きつとうまく話してくれると思う。

なのはサイド

にあああああ！紅君が先に帰っちゃったことを、アリサちゃん達に話したら、とっても怒っちゃって、とても怖いことになったちゃったの！しかも

ア「学校でしっかりと話を聞かなきゃね？（笑）」

あの時、初めて笑顔が怖いと思ったの。

次の日

紅サイド

あゝよく寝た。昨日、なのはに頼んどいたけど、良かったよな？

寝起きに一番初めになんてこと考えてんだろうな、俺。

紅「メサイア、あの時、なのはに頼んどいて良かったよな？」

一応、メサイアに聞いてみる。

メ（なのは嬢は、嘘をつくのは苦手かと思えます。うまくいった可能性は50%でしょうね）

紅「やっぱりそうかな？」

こんなこと言いながらも、しっかりと、学校に行く準備はしている。

ピンポン

チャイムが鳴った。

ガチャッ

今度は、ゆっくり開ける。二度はしない。

案の定、居たのはなのはと、物凄い笑顔（目が笑ってない）のアリサとすずかが居た。

ア「昨日、どうして、先に帰ったのか、聞かせてもらえる？」

またもや、この質問か！

いまいち状況がつかめない人に説明しよう。俺は家を出てから、アリサとすずかに、ずっとこの質問を出されていたのだ。もちろん、なのはに念話でなぜこうなったのかの報告を聞いたら、素直に。俺

が帰ったとしか言っではいなかった。つまり、なのは説明を聞いたアリサとすずかは、俺は無断で家に帰ったというように聞こえてしまっていたのだ！

それにより、いま、地獄の質問攻めにあっていたのだ。

この状況にウンザリしていた俺は取り返しのつかないことを言っていた。それは

紅「あーもう分かった！学校に着いたら話してやるから、今は大人しくしてくれ！」

こんなことをいつてしまった。これにより、俺は教室に着いたら、二人に、なぜあの時帰ったのかを嘘を混ぜていった。幸い、二人は信じてくれた。良かった良かった。

放課後

紅「さーて終わった終わった！」

な「ねえ、紅君、土日暇？」

なんだ？なのはの奴、こんな質問して？

この時、気づいていれば！あの二人が目を光らせているのに気が付いていれば！俺は気が付かずに言った。

紅「おう、暇だぜ！それが、どうした？」

すると、なのはがうれしそうにこんなことを言ってくれた。

な「アリサちゃんとすずかちゃんの家族と一緒に温泉に行くんだけど、紅君暇なんだったら誘うって事だったの！で、紅君暇だったから、一緒に行くことになったの！」

紅「ま、まて！なのは！俺に拒否権は」

な、ア、す「」「無いよ？」「」

見事にハモリやがってくそ！

俺は結局、ついていくことになりましたとさ

旅行（後書き）

今回、ちょっと短いかな？

旅館（前書き）

遅くなつてすみません

旅館

ただ今、車で移動中です。

ここで、車の中の状況をお伝えします。

俺は一番後ろの席の真ん中に座り、その右手をなのはが嬉しそうに掴み、また、左手にはさすがが抱きついております。しかも、二人して、笑顔で、目が笑っていないという状況、この状況を言葉で表すのだったら、この一言につきます。それは

修羅場

これしかないでしょ？この状況表すのって？

しかも、前の席から二つの殺気が上がってるしさ？

殺気を出してる二人はもう分かってるでしょ？あえて言わないけど。

こんな感じで移動し、今はもう、旅館の中で、寛いております。いやゝ疲れたね！特に車での修羅場で！！

あ、もちろん、なのは達とは別の部屋だよ？一緒だったら、あの二

人に殺される。これだけは分かる。

だが既に車で死にそうになったけどね！

しばらく、寛いでいると、桃子さんが部屋に来て、

桃「温泉に入りましょ？」

その提案に乗ることになり、みんなで移動し、脱衣室の前で、なのは達と別れる。え？ユーノ？ほつとくよ？茶化すけど

紅（おゝいユーノ！どうだ？湯加減は？）

ユ（それどころじゃないよ！目を開けたら何かが終わるからね！！それより、なんで、教えてくれなかったの？そして助けてはくれなかったの？）

ユーノの必死な念話が帰ってきたので、楽しそうな声で返した。

紅（そのほうが、面白そうだったからだよ）

ユ（迷惑だ〜）

ユーノの悲鳴のような、念話が届いた。

温泉から上がり、休んでいると、なのは達が来た。なのはの髪おろしてんの初めて見た。かわいいな

だが、なのはの細い肩の上にはグツタリとしたユーノがいた。上せたのか？

確認してみよう

紅（大丈夫か？ユーノ）

ユ（大丈夫じゃないよ！酷い目にあつたよ？）

そうか、ご臨終さま

そのまま俺は部屋に戻った。

そして、夜中

メ（マスター、ジェルシードです。なのは嬢はもう向かった様子ですがジェルシードの近くに魔力反応が二つ、これは、フェイト嬢です）

紅「分かった」

俺は直ぐに気配を消して外に出て、なのは達の後を追った。

なのはサイド

夜中に、ジェルシードの反応があったから、現場に行ってみたらフ
ェイトちゃんがいた。

な「フェイトちゃん！そのジェルシードを渡して？」

私はなんとかお話で解決できないかなと思って話しかけました。

フ「渡さない。これが必要だから。」

ア「フェイト、私があの子を倒すよ？わざわざフェイトがやる必要
はないからね？」

赤い犬がそういつて襲い掛かろうとコツチに来たのでレイジンググ
ートを構えました。

でも、その時ユーノ君が出てきて、

ユ「彼方の相手は僕だ!!」

こういつてから魔方阵を展開して、消えちゃった。大丈夫かな？

フ「良い使い魔をもってる」

使い魔？でも。ユーノ君は

な「ユーノ君は使い魔じゃない！お友達！」

こうして、私とフェイトちゃんの戦いが始まった。

紅サイド

紅「メサイア、セツトアップ」

メ（オールライト、全システムオールグリーン、セツトアップ）

俺はメサイアを起動させ、纏った。

そして、なのは達の方を見る。メサイアを纏うと、カメラアイが起動し、遠くもしっかりと見えるようになる。

そのまま、試合観戦をしてると、なのはが負けそうになっていたの
で止めに入った。

紅「両者、そこまで！この試合、フェイトの勝ちだな？」

レ（プットアウト）

俺がそういうとレイジングハートはジェルシードを出した。それを
フェイトは掴み、

フ「主思いの良いデバイスだね」

そういつて、どこかに転送していった。

紅「なのは、今のはお前の負けだった。分かってるよな？」

な「うん、分かってる。でも、ぜーたいフェイトちゃんとお話する
の！」

なのは新たな決意を固めた。まあ、仕方ないか？

この後、俺達はすぐに帰ったが、抜け出したのがばれていて怒られた。その時、土郎さんの妄想が行き過ぎていたのはなぜなんだろう？分からん

分かりたくないけど

どんな想像だったかは、お任せします。あえていうなら、エロいことです。

旅館（後書き）

つかれた。でもいいのが書けた？ような気がする

暴走（前書き）

久々の投稿です。

すみません、テスト期間なものでして・・・

暴走

さて、前回怒られてしまい散々反省しました紅です。

昨日の続きをお伝えします。

あの後、部屋に戻って寝てただけだね？

今、ナゼか右にアリサ、左にすずか、そして腹の上になのはが、それぞれ抱きついて幸せそうに寝ています。

驚いたね！

寝てるのにいきなりお腹圧迫感あるし、腕動かんしさ？変だと思って目開けたらこの光景が広がっていた訳ですよ？

数分硬直しちゃってね？起そうと思って声かけたけど、返ってくるのは幸せそうな寝息だけ。

腕も動かせない。動かそうと思って何か当たっており、動かしたら何かが崩れると俺の本能が警鐘を鳴らしており、起きてから指一本動かしておりません！

なので、このまま、なのは達が起きてくれるのを待ちます！

数時間後

ア、な、す「「「／／／「「「

士「．．．．．．．．．．．．．．．．」

こうなるわけですよ？

いきさつは分かっていると思いますが、あえて説明するところですよ。

まず、俺は士郎さん達と同じ部屋で寝ていた。

そして、さっきのあの状況で数時間硬直、

もちろん、数時間もあの状況でいつまでもいたら、隣で寝ているあの二人に見つかればお陀仏は間違い無し、さてどうするかと考えていたら、

ア、な、す「「ふあああ、よく寝た」「」

士、恭「「よく寝た。ん？・・・ああ！キサマア！」」

この後、さっきのシーンに戻る

紅「なあ、なのは、なんで俺の布団にいたんだ？」

な「え？なんでって言われても私達昨日あの後寝たし、起きたら紅君の上でねてたの」

紅「は？なんで？」

な「わかんないの」

桃「あら？起きてたの？もっと早くにすればよかったわねえ」

紅「桃子さん、彼方だったんですか？」

桃「そうよ？だって面白そうじゃない？」

なんてことしてくれてるんだあんたは！

な「お母さん、何してるの！」

桃「あら？なのはは嫌だった？」

な「そんなことはないけど・・・ボソボソ」

桃「じゃあいいじゃない？」

なんか、とても桃子さんが怖くなってきた。

あのあと、土郎さんと恭也さんは桃子さんに肅清を受け、大人しくなり、家に帰るまでずっと大人しかったそうです。

なんか、今日は朝から疲れが溜まっていったな

こんな調子で明日、学校大丈夫かな？

暴走（後書き）

どうでしたか？

ちょっと文が少ないです。ごめんなさい

第20話（前書き）

やっとテスト終わった

第20話

前回、桃子さんの陰謀により、酷い目に遭いました紅です。

正直、辛かったです。

とても辛かったです。士郎さんと恭也さんに見つかったときのあの恐怖感！

そして、桃子さんの陰謀だと分かったときのあの脱力感！

もう、嫌になったね！

さて、こんな愚痴を言ったところで何も変わりはないので、今日もがんばります！！

さて、いつもどおりの学校風景なんて書きません！

学校も終わり、今は家で鍛錬しております。

紅「そろそろ終わるか」

そう思つて、バリアジャケットを解いて、家に入ったらアノ反応があった。

紅「！！ ジェルシードか？場所は……海の近くの公園か？まあ良い！メサイアセットアップ」

メ（オールライト！セットアップ！！）

俺は直ぐにメサイアを起動させ、認識障害をかけてから、飛び立ち、ファイター形態となつて、むかつた。

なのはサイド

ジェルシードの反応があつて、現場に来てみるともうフェイトちゃんがいて、封印しちゃつた。

な「フェイトちゃん！ジェルシードを渡して！」

フ「渡さない」

な「だったら！お話させてもらうのー！」

そういつて、なのははレイジングハートを構えた。

フ「……………」

フェイトも無言でバルディッシュを構えた。

数秒間、二人はまったく動かずに、睨み続け、そして、動いた時に

？「時空管理局だ！その二人は直ちに戦闘行動を停止し、こちらの指示に従え！」

誰か出てきたの。でも次の瞬間には、

？「うわー！」

青色のバインドで四肢を固定されて

ガガガガガガガガガガガッ

？「うわあああ
」

いきなり現れた紅君にメツタ撃ちにされていたの。

紅サイド

ただ今。なのはの所に急行中なんだけど、間に合うかな？

そう思ってスピードを上げて飛行していると、

メ（マスター、新たな魔力反応です！）

紅「何？」

なのはの所まであとちょっとなのに来てしまったようなので

紅「メサイア、バトロイドになるぞ。あとスナイパーライフルを」

メ（イエス、マイマスター）

俺はバトロイド形態になり、スナイパーライフルを飛行しながら構える。

そしてクロノの四肢にバインド弾を打ち込む

紅「メサイア、命中したか？」

メ（命中しています。マスター）

紅「そうか。なら、ガンポッドを」

メ（イエス、マスター）

そして、俺はスピードを上げてクロノの懐に入りありったけの弾を撃ち込む。

百発ほどぶち込んだら、止めて見ると、案の定クロノは、気絶していた。

紅「さて、お二人共、続きをどうぞ」

な「う、うん」

フ「……………」

ア「鬼畜だねアンタ」

ユ「いくらなんでもやりすぎ」

いろんな事言われた。フェイトに限っては何も言っていない。なんか悲しいな

こんなことやってたら、目の前にディスプレイが表示されて、緑色の髪の人、リンディ提督が映った。

リ「ごめんなさい？ちょっと待ってくれる？その子も」

その子とはフェイトのことだろうか？

ちなみにフェイトは、さっき言われたときに逃げてしまった。

リ「逃げられちゃったわね。まあいいわ。そこのお二人、クロノを担いでそこで待っていてくれる？」

紅「わかりました」

な「どうなるの？」

さて、どうなることやら、楽しみだねえ

第20話（後書き）

なんか、話をとばしてしまったような気がする。

ね この後の展開は、ゼロ魔をやりたいと思います。 まだまだ先だけど

断り（前書き）

新しい小説を書きました。そちらもどうぞよろしくお願いします。

断り

あのあと、俺がクロノを担いで待っているとなのはが近くに寄ってきた。まあ、転送するんだし、かたまったほうがいいよね？そんなことではばらく待つてると、一瞬で目に映る光景が変わった。アースラに転送されたのだろう。すぐによつてきた救護班？に担いでたクロノを預け、指示に従い、ブリッジに行った。途中で俺がユーノに変身の解除をたのんで戻ってもらった。その時、なのはがうるさかったが気にしない。

そんなことをやっている内にブリッジに到達、ドアが開かれた。そして俺達の目に映ったのは・

リ「いらっしやい、コッチにきてもらってもいい？」

和室のようなブリッジで茶を飲むリンディさんが居た。

な「・・・・・・・・」

ユ「・・・・・・・・」

紅「・・・・・・・・」

リ「ズズズ・・・」

ただ今、こんな状況です。

正直、クロノをおとしたのは拙かったようで、会話がありません！
リンディさんの茶をすすする音しか聞こえません！！

こんな中、沈黙を破ったのは以外にもなのはだった。

な「どうして、私達を此処に呼んだんですか？」

リ「実はね、彼方とあの黄色い髪の子が戦っているときに次元震が発生しちゃったのよ。で、クロノ、あの黒髪の子が彼方達を止めに入っただけど……ね？」

紅「俺が、問答無用に撃墜してしまったと？」

リ「ええ、そうよ。まあ、彼方達が此処に居るのだし、良いんだけどね？」

そういうと、にこりと笑って、砂糖を大量にいれた、リンディ茶をだして、

リ「飲む？」

もちろん、断ったよ？あんなの飲むの、たしかフェイトぐらいだよ？

ちなみになのははというと、苦笑いしながら断っていた。ユーノも同じく。

リンディさんは

リ「残念、美味しいのに……」

と言っていた。あなたは間違えていますよ？リンディさん。

このあと、ユーノがジェルシードを見つけたこと、護送中に襲われ、この世界に落とされたこと、そして、自分の決意のことを話した。

リ「すばらしい決意ね」

ク「でも、無謀でもある」

クロノ、いつの間に回復したん？

リ「クロノ、いつの間に？まあいいわ。それよりも伝えなきゃならないこともあるしね？」

にこりと微笑みこういった。

リ「これより、現時点をもってそのジェルシードの搜索は管理局が受けますので指し当たっては、

紅「え？そうなん？じゃあ帰らせてもらうよ。なのはも帰ろうか」
っえ？」

どうやらリンディさんは俺の言ったことを分かっていないようだ。
なのでもう一度説明する。

紅「あんたらがジェルシードの搜索受けたんだから、俺達が必要な
いだろ？それに勝手にコッチのこといろいろと調べてるしな！」

こっいつて、俺はメサイアのナイフを俺達をスキャンしたであろう

物に投擲、破壊する。

紅「しかも、後日に呼びだす？なんの必要がある？俺達は部外者なんだろう？なのに呼び出す。その理由は？簡単だ。俺達に考える暇を与えれば、少なくともなのはそちらに協力を申し出るだろう。それを利用するためだろう？今管理局は人手不足のはずだからな？俺やなのは格好の人材だ。そうだろう？リンディ提督？」

そこまで言うで一息つく。なのはは未だに混乱中、ユーノは信じられないという顔をしてるし、クロノは顔を歪めている。そしてリンディさんは驚いていた。

リ「驚いたわね。見破られていたなんて、ごめんなさいね？でも、確かにそのとうりよ。今の管理局は人手不足、ほしい人材は引き入れなきゃならないの。分かってね？」

こんなことを言ってきたがもうあきれて何もいえなかった。

そんな中、なのはが口を開いた。

な「私は協力します。ジェルシード集めは、私がしなきゃいけないから。紅君は？」

俺に話をふってきた。

紅「俺は最初から協力する気など無い。なんでこんな歪んだ管理局に協力なんてことをしなければならん」

リ「!!」

ク「貴様！お前のような力があれば、たくさんの人を助けることができるんだぞ？」

紅「ふん、協力できなければ、俺を犯罪者にでっち上げ、殺すんだろ？そついうところだからな管理局はな。」

リ「……ッそんなことはないわ……！」

紅「そんなこと、誰が言い切れる？これだけは言っぞ？俺は絶対に管理局に協力なんぞしない……！」

俺はすぐに、なのはの腕を掴み、どこかに、レポートした。

リンディサイド

ク「逃げられてしまいましたね？艦長」

リ「そうね。でもあの子、なんで？」

本当になんであの子、あんなことを？

そう考えているとなにかが転送されてきた。

よく見てみると、紙だった。なにか書いてあるので読んでみると

『俺達は独自にジェルシートを探す。絶対に管理局には協力しない
』！

あの子達、すごいわね

紅サイド

俺は家の近くになのはとユーノを掴んで転送した。

ユ「どうしたんだい？紅？」

な「紅君、どうしてあの人たちに協力しないの？」

なのはが質問してきたので、原作でのことを、なのは達に教えた。

すると、明らかに管理局に対しての嫌悪感を出していた。

ユ「そんなことをしていたなんて、許せない！！」

な「許せないの！！」

ユーノでさえ、嫌悪感をあらわしていた。

紅「未来には、管理局に協力することになるんだろうけど、絶対に信じてはいけないよ？それと、管理局に協力するときには、その感情を隠して、表面上は『管理局の正義』を信じているようにしようにしないと、コッチが消されるからね？」

な「わかったの！」

ユ「そのほうがいいね。でも、許せない！！」

このあと、管理局には協力しない形でのジェルシード集めが行われた。

そして次回、プレシアとの決闘！！

断り（後書き）

かなり飛ばしてしまいました。ごめんなさい

解決（前書き）

飛ばしてしまつて本当に申し訳ない！

解決

その後、管理局には協力せずにジェルシードを集め、今は原作ではフェイトが海にあるジェルシードを無理やり発動させるところにまできた。

アースラ内

リ「このままじゃあ、自滅ね、落ちるのを待ちましよう」

ク「そうですね。そのほうが安全でかつ、楽に終わりますしね。」

リ「さて、あの子達は来るのかしら？」

紅サイド

今、海の近くにいるんだけどフェイトが無理やりジェルシードを発動させる気配を感じた。

紅「まずい、あのままじゃあ、自滅だ」

な「なんとか止めなくちゃ」

ユ「でも、どうやって?」

こいつら、俺のこと忘れてない?

紅「大丈夫だ。俺が何とかする。」

な「できるの?」

あの台詞を言わせてもらっぜ!!

紅「俺を誰だと思ってやがる?俺は不可能を可能にする男だぜ?」

一度言ってみたかったのよこの台詞

な「そうだね!」

ユ「お願いするよ」

よし、二人ともオツケーくれた。

紅「じゃあ、いくぜ!!」

俺はすぐに大規模な結界を張って、メサイアをセットアップさせる。

紅「メサイア、ジェルシードとの距離は?」

メ（およそ500メートルです。）

紅「了解、任務を開始する。」

そういつてから、スナイパーライフルを構え、弾をリロード、スタライザーフィン、光学射撃サイトを起動させ、発動しているジェルシードに、狙いを定め、封印の魔法を封じ込めた弾を射撃する。

紅「全弾命中、任務完了」

見事に全弾命中しました。まあ、メサイアの補助もあつたから外すなんてこと無いんだけどね。

紅「なのは、フェイトの所に行つて来い。お前の気持ちを伝えにな」

な「うん！」

さて、たしかこの後、なのはとフェイト戦つて、フェイトがなのはの砲撃くらつて、終わるんだっけ？

な「デイベインバスター！」

あ、今食らつた。さて、このあとなにがぁ（マスター、攻撃がきます！）なに！？

よく見ると、フェイトの上に反応があつた。くそ！

紅「よける！」

咄嗟に叫んだが、二人ともキョトンとしている。くそ、間に合え！

俺はすぐになのは達の上空に着くと、すぐに最大防御のプロテクションを張つた。

ズガアンッッ！

すぐに、プレシアが放った雷はプロテクションに当たり、遮られた。

紅「ふいゝ危なかったゝ」

良かった。間に合って

な「ありがとう、紅君！」

フ「ありがとう」

おお、フェイトからお礼言われた。

紅「俺は今からプレシアのところに殴りこんでいくけど、お前も来るか？」

な「行くよ！」

フ「・・・行く」

二人とも行くんだな。なら、

紅「これを飲め」

二人に緑色の液体の入ったビンを渡す。

な「紅君、これは？」

なのはよ、顔が引きつっているぞ

紅「安心しろ、回復薬だ。まあ、余りの効き目により、どんな病気でも治ってしまうという優れたものだ。たとえ、末期の癌にかかっていても治るぞ。それに、魔力も回復する。」

な「すごい！」

ユ「ありえない。」

紅「関心してないで飲め」

なのはとフェイトが飲んだのを確認してから、転送準備をする。

紅「じゃあ、行くぞ」

こうして、俺達は、プレシア邸に乗り込み、敵を俺だけがなぎ倒していった。

だって、そのほうが、早いじゃん！

そしてただ今、プレシアの前です。

プ「何しに来たの？彼方なんか要らないわ。何処えとも消えなさい！」

フ「話があります。私は彼方から見れば人形なのかもしれません。ですが、私は彼方の、娘です」

そう言いきって、フェイトはうつむいた。

しばらく沈黙が続き、俺が口を開く

紅「プレシアさん、俺はアリシアを生き返らせることができます。」

プ「本当にできるの？」

聞いてきたので、話を進める

紅「本当です。ですが、お願いがあります。フェイトを彼方の娘と認め、家族三人で仲良く暮らしてください。」

プ「それくらい、当たり前よ」

紅「では、やりましょう。まず、俺の家にも行きますかね。」

俺はすぐに転送魔法を発動し、家に転送した。

紅「まず、アリシアをポットから出して、タオルで体を隠してください。俺男なんで」

こういつて、後ろを向いた。

プレシアはすぐに準備を始めていたが、なのはとフェイトは俺に嫉妬？の視線をくれている。なのはは分かるがフェイトにはフラグ立てた覚えはないんだけどな？

プ「できたわ」

どうやら、準備が完了したようだ。

紅「さてと」

俺は心で話す

紅（爺、いるか？）

神（（どうしたんじゃ））

紅（一人、生き返らせた奴がいるんだがいいか？）

神（（できるぞ。何せ最高神だから））

紅（そうか、ありがとう。ちなみに生き返らせる奴の名前はアリシア・テストロッサだ）

神（（わかつとるよ））

紅（そうか、じゃあな）

プ「何をしているの？」

紅「ん？神様にアリシアを生き返らせてくれって頼んでんだよ」

プ「！！ッ信じられない。あなたは何者？」

紅「俺は、……省略」

いろいろな話したら

プ「災難ね」

って言われた。地味に傷ついた。

そんなこといつてると

神（（できたぞ））

神が教えてくれた。あとで感謝しないとな

紅「生き返りましたよ。」

こう伝えた瞬間

ア「ううん」

アリシアが目覚めた。

プ「アリシア！」

プレシアが泣いている。フェイトも泣いていたので、すぐに部屋を出た。久しぶりに家族が揃ったんだ。邪魔しないでおう。

しばらく待っているとプレシアが出てきた。

プ「ありがとう。これからは、しっかりとあの二人を育てていくわ。大事な”娘”なんだから。」

紅「そうですか。では、お幸せに」

こうして、この事件の幕は閉じた。

解決（後書き）

なんか、おかしいことになってしまった

新たな地（前書き）

総合ユニークアクセス14000突破しました。とてもうれしいです。

これからもがんばります。

新たな地

その後、管理局が来て、事情を話し、なんとか事なきを得た。しかし、その代償が、俺やなのは、そして、テスタロッサ家全員が管理局員になるということだった。

もちろん、全員受け入れたが、前もって俺が、全員に管理局の裏を話しておいたので、管理局を信頼するということは無いと思う。

さて、あれから1週間が過ぎた。この一週間で一番の思い出といえば、フェイトやアリシアの幸せそうな笑顔である。あの笑顔は正直、男が食らったら、一発で骨抜きにできるほどの威力である。

しかも、もつとうれしいことに、アリシアとフェイトが俺に懐いてくれたのである。もう、べたべたに、これにより、なのはから殺気の籠った視線を貰ったのは言うまでもない。

それはさておき、実は悩み事が増えてしまった。今からそのことを話そう。

あれは、二日前、学校での出来事だった。

実はこの日、アリシアとフェイトが、学校に転校してくるのである。

俺もなのはも一緒にクラスにきたらいいなとは思っていたら、なんと、二人とも俺達と同じクラスに来たのである。これにはさすがに驚いてしまい、ただ呆然としてしまった。

え？これの何処が悩みの種かって？いや、悩んでるとこは此処じゃ

ないんだよ？ワトソン君

問題はこの後に起こった。

昼休みに飯を食おうとしたら、いつもの三人プラス、フェイトとアリシアに誘われたのだ。このとき、教室中の男子から非常に強力な殺気と嫉妬の念が籠った視線が四方八方から送られてきたのである。

もう嫌になりながらも、いつもの場所に行き、そこで喋りながら弁当を食べるということをしたのだが、今回、いつもより視線が強烈で、かなり怖かった。

そんなことにより、悩みの種が一つ増えたのである。

これが、一週間の間で起きたことである。

しかし、俺はこれ以上の不幸が、この先に待っていることを知らなかった。

朝

「ふあゝあ。おはよう、黒刀、メサイア」

黒、メ（おはようございます。マスター）

いつもどおりにおきて、ふと部屋を見渡した。

すると、昨日までなかった大きな鏡があった。

紅「おい、あれは何だ？」

黒（何かの魔道具かと思われます。）

魔道具ねえ？

メ（もしくは。転送陣です。）

紅「ん？転送陣？」

メ（はい。何処にいくかを確かめになるのならば、私達を装着し、着替えてからでお願いします。）

あ、そういえば着替えてなかったな

俺はすぐに着替えて、黒刀達を装着して、入ろうと思ったがふと思いつき、紙をだしてこう書いた。

ちよつと行ってくる。心配無用。いつか帰る。

と書いて机の上においてから、また、鏡に振り返り、触った。

すると、

ズザザザザザッ

吸い込み始めたので、

紅「どんなところでドンと来い！」

突っ込んでやった。

ある世界

「宇宙の果ての何処かにいる私の僕よ！

神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。

我が導きに答えなさい！！

五つの力を司るペンタゴン。

私の運命に従いし“使い魔”を召喚せよ」

そこでは、本日何度目かになるか解らない呪文の詠唱をする少女の姿があった。

その少女はルイズ、公爵家に生まれ、頭脳明晰、容姿もすぐれる才女でもある。

トリステイン魔法学院は魔法使いの貴族の学校であり、彼女はそこ

に通う学生だ。

だが、彼女には貴族にとって致命的とも呼べる問題があった。

「お願い・・・もうドラゴンだとかグリフォンだとか贅沢は言わない。だから出てきて」

周辺には何かの爆撃があったかの如く、クレーターが広がっている。

ソレらは全て彼女が作った穴で、彼女が魔法を使うと全て爆発してしまう所為だった。

そう彼女は魔法使いの子でありながら、魔法の成功率が0%なのである。

同級生たちは既に儀式を終えて、自分の呼び出した使い魔と戯れているが、彼女だけ今だ召喚が成功していなかったのだ。

「おい！早くしろよルイズ！」

「日が暮れる前には成功すればいいなあーおい！」

心無いヤジが飛ぶが、ソレを無視して彼女はゲートを繋げる事に意識を集中させる。

もうとにかく“誰でも良い、とにかく来なさい！”と気合を入れたのが不味かったのか、ゲートをつないだ瞬間、今までで最大の爆発を引き起こしたのだった。

そして開かれた召喚ゲートから現れたのは、なんと人間、しかも二人もいた。

一人はきよろきよろと辺りを見渡しており、もう一人はコツチも一度みて目を丸くして、隣にいたもう一人をみて、もつと目を丸くして、途端にこんなことを言った。

「俺に契約をするな！もし、した場合、全員殺す！」

紅サイド

飛び込んでみたら、平原にいた。そして目に映ったのはピンク色の髪をもつ少女、隣には、日本人らしき少年がおり、なんだか見たような顔で、記憶の中で何処で見たか探すと、出てきた結果に目を丸くした。

なんと、ゼロの使い魔の「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」と「平賀才人」だったのである。そして、俺の記憶が正しければ、これからルーンを刻まれて一年後に戦争に借り出されるのである。

この思考にたどり着いてからの俺の反応は早かった。

すぐに

「俺に契約をするな！もし、した場合、全員殺す！」

といったからである。

ルイズサイド

使い魔を呼び出せたと思ったら一人が俺に契約するなですってえ？

ル「冗談じゃないわよ？さっさと契約するからね」

そういつてから、未だ状況をつかめていないほうに近寄って契約する。

そしたら、次にもう一人の方に近寄ろうとすると、そいつは

「くるな！」

といったと思ったら、そいつの服が一瞬で全身真っ黒の服に変わり、黒くて細い剣を構えた。

あゝも〜どうなってるのよ！！

新たな地（後書き）

ゼロ魔突入です。

混乱（前書き）

読んでくれてありがとうございます。

混乱

ルイズが契約をしようと、こっちに近ずいて来たので、

紅「くるな！」

といって、黒刀をセットアップさせ、構える。

ルイズたちが驚愕しているが、知ったこっちゃない。こっちは命が掛かってるんだからな。

コ「失礼、私の名はコルベールです。できれば、なぜ、そこまで契約を拒むのか、なぜ、彼方の服がいきなり変わったのかをお聞かせ願いたいのですが？」

いきなり、コルベールが話かけてきたのだが、デバイスのことはなしても大丈夫かな？

紅「いいだろう、話してやる。」

まず、なぜ契約を拒むかは簡単だ。契約なんてされたら、帰れないからな。それと、そいつと契約すると、一年後に七万人もの兵士にそこにいる奴と二人だけで戦わなくてはいけなくなるからだ。しかも、一回死ぬことになるしな。」

ここまで話して、一息つく。

コルベール氏やルイズは驚愕してるし、才人は混乱してる。が、このまま話を進める。

紅「さて、次はなぜ、俺の服が変わったかだが、それは、俺がデバイス、こっちで言えば、杖だな。それを使ったからだ。デバイスを起動させると、鎧が展開される。俺の鎧がこの服だな。ちなみに貴様らが魔法使っても、俺には掠り傷一つ付かんしな。なにか質問は？」

そういうとコルベール氏が質問してきた。

コ「まず、君は魔法を使えるのかね？そしてまだ聞いてなかったが名前を教えてくださいるか？」

紅「俺は魔法ぐらい、使える。貴様ら見たく、杖なんぞ使わなくてもな。それと俺の名は、暁 紅だ。こちら風に言うならば、紅 暁だな。」

そう答えると、全員、驚愕する。

「まさか、貴族？」

そんな声が聞こえてきたので訂正する

紅「違う。俺やそこにいるやつ、平賀才人も貴族ではない。俺達は異世界より召喚された。俺達の世界では、苗字と名前は必ずあるんだ。」

そう言うとき余計ざわめきが強くなった。

そんな中、コルベール氏が聞いてきた。

コ「君は魔法を使えるといったね？しかも、杖もなしで。君たちの

世界では、魔法は杖を使わないのか？」

紅「確かにそうだが、サイトは魔法の存在を知らない。知っているのは極少人数だ。ほかには無いな？」

見渡すと、誰も答えない。まあ、いいか。

紅「俺は、元の世界に帰るぞ」

こう言ってから歩き始めようとするが、サイトが食いついてきた。

オ「おい、今、元の世界に帰るとかいったよな？帰れるのか？」

紅「帰れるぞ？俺には神のデバイスがあるからな」

こういうとサイトが

オ「俺も元の世界に帰してくれ！」

すがってきた。が、

紅「無理だな。」

オ「なぜだ？なぜ無理なんだ？」

紅「簡単だ。お前はもう契約されているだろう？そうになると、お前はあのピンク髪の奴から、離れられないんだよ。たとえ返しても、あいつが望めばお前はまた召喚されることになる。それでもいいのか？返してほしけりゃ、その契約をきればいい。」

そういうと、才人はすぐにルイズに詰め寄った。

才「おい！今すぐ契約を切れ！」

が、

ル「無理よ。契約を切れるのは死んだときだけなの！」

ルイズはうなだれてしまった。

また、サイトも戻れないと分かり、項垂れた。

紅「さて、戻るかな」

戻る準備を始めようとするが

コ「まってください。どうしてもだめなのですか？」

紅「だめだといいたいが、いつでも戻れるから、別に残ってもいいが、条件がある。」

コ「その、条件とは？」

紅「契約をしないこと、俺に拒否をする権利をくれること、此処の貴族達と同等な生活だな。ここって平民と違って自由にできないだろ？だからだな。」

コ「約束しよう。」

紅「なら、いい」

こうして、俺は、表面上は、ルイズの使い魔としてこのトリステイン魔法学校に居座ることになった。

朝

紅「朝だ。おきろ」

俺は表向きはルイズの使い魔だが、本当は違うという立場だ。

ル「うゝんってアンタ誰よ？・・・ああ、私が召喚したんだっ
たわ。」

こうして、俺のこっちでの生活が始まる。

教室

え？朝食？すつ飛ばしたけど、なにか？

ただいま、ルイズが連金をしようとしている。

俺はすぐに自分とサイト、ルイズの周りにプロテクションを張って、爆発が当たらないようにして、さらに、石の周りにも、プロテクションをはって、被害が出ないようにした。

ドッカーン！！！！

派手な音とともに、石が爆発したが、俺の張ったプロテクションのおかげで被害はゼロ。まあ、当然だけど。

ちなみにこのとき、タバサやキュルケなどが、俺の張ったプロテクションをみて、驚いていた。まあ、そうだろうな。

次回、ギーシュとの決闘という名の苛め

混乱（後書き）

短いかな？すみません

決闘（前書き）

不定期更新、しかも気が向いたらしているので、申し訳ないです。

決闘

ただ今、決闘場へと。

え？ギーシュの二股暴露事件？すつ飛ばしたけど、なにか？

ギー「よく逃げなかったな！平民！いまなら、土下座をすれば許してやろう！」

ギーシュがそういうと周りから、笑い声が聞こえ、

「ギーシュ、そんな奴、やっちまえ！」

などと、はやし立てている奴もいる。うぜえ。

ギー「では、決闘を始めよう！僕の名はギーシュ・ド・グラモン！二つ名は青銅だ！」

紅「ハア、此処の貴族ってのは、馬鹿しかないのか？」

周りから野次が飛んできた。本当のこと言っただけなのに

紅「まず、なんでこういったか理由を言ってやろう。まず、試合開始してから、自己紹介するってのがおかしい。もう始まってるんだぞ？戦場じゃあ、即、お陀仏なんだよ」

まったく、常識が無いのかねえ？この世界は？

ギー「だが、これは決闘、これが決闘のルールだ。」

ちよつと遊ぶか

紅「これは、決闘だったな？なら、命を懸けて、殺るんだろう？だったら、遠慮は無用だよな？」

ギ「ふん！言つてろ！今から始める！僕はメイジだから、魔法を使い、この」

そして、ギーシュは、持っていた薔薇の花びらを地面に落とし、

ギ「ワルキューレを作り、相手をさせるよ」

青銅のゴーレムを作った。

だが、ただの青銅、俺が今から召喚するあれの足元、いや、存在にすら追いつけない。

紅「ならば、俺も召喚しよう。俺も魔法使えるしね」

みんな、びっくりしているが、まあいい。

紅「後悔するなよ？ギーシュ・ド・グラモン？お前は光栄に思え、なんせ、これをその鉄くずにしか使わないことをな！」

そついうと、俺は、あれを召喚する。

紅「シホン、ヨハネ、ペテロン」

そつ、これは、メサイアGに搭載されているシステムだ。そして、

言い放つ

紅「いっけえええ！」

そして、三機のゴーストが戦闘を開始した。

そこから、一方的だった。ゴースト達がワルキューレを跡形もなく、破壊して、俺の元に帰ってきたからである。ギーシュは

ギ「こんなの、嘘だ」

とか呟いてる。そろそろしめるか

紅「メサイア、セットアップ」

俺はメサイアをセットアップし、スナイパーライフルを構える。ギーシュは止まっているので、スコープを覗くのは一瞬で良い。そして、ギーシュの四肢に撃つ。

ギ「……ッこれは？」

ギーシュの四肢は俺の撃ったバインド弾により、動かせなくなる。

そして、俺は、ガンポッドに持ち替えてゆっくり、近寄る。その間、ギーシュは

ギ「やめろ！降参するから許してくれ！」

と叫んでいた。が、俺はギーシュの目の前でガンポッドをギーシュの腹に押し付けていった。

紅「お前は、いや、お前達貴族はそう言った平民に何をした？」

そして、俺はギーシュの腹に非殺傷設定の魔弾をできる限り、打ち込んだ。

このあと、俺は、ファイター形態になり、学園に戻った。

この後、学園には、

ルイズの召喚した使い魔は、絶対に怒らせてはいけない。

という、法則ができていた。

次回、
フーケ？かな？

決闘（後書き）

短くてすみません

決闘後（前書き）

遅くなつてすみません。

決闘後

ルイズサイド

紅がギ―シュと決闘をしてしまった。

平民が貴族に勝てるワケないのに・・・

何度も止めた。けど、行ってしまった。

そして、広場での決闘を見て、愕然としてしまった。

紅はぼくとしていて、ギーシュがワルキューレを出して、なにか言ったかと思ったら、紅の目つきが変わり、何かが紅の周りに出てきた。

ル「なに、アレ？」

それは、空中に浮いていて、しきりに動いていた。まるで、すぐに倒したとしても言うかのように動いていた。

そして

紅「シホン、ヨハネ、ペテロン、いっけええええ！」

紅がそういつたら、三つの何かが、ギーシュのワルキューレに襲い掛かっていた。

そして、次に見たのは、粉々になったワルキューレと紅の周りに何事も無かったかのように浮いている三つの何かだった。

ル「紅！何よアレ！」

私は、すぐに問いかけた。

紅「アレはゴーストって言う俺のゴーレムみたいなものだ。まあ、あの二股やろうとは性能が月とスッポンといったとこだ。」

ル「何よそれ？」

紅「ああ、つきは空に浮かんでるだろう？でも、亀はその月にはどうやっても届かない。一言でいえば、ワルキューレはどんなに凄くなっても、俺のゴースト一体にも及ばないんだ。」

ル「なによそれ？じゃあ、さっきのゴーストとっていうのは、世界最強？かもしれないの？」

紅「まあ、そうだろうな。あのゴーストは、自分達を作れるぐらい凄い力を持っている国をたった三機で、壊滅させることができる。この国は一機だけで、壊滅させられるだろうな。」

ル「なっ！？」

周りで偶然きいていた人たちも驚いていた。あの無口のタバサでさえ……

決闘後（後書き）

今回は異様に短いです。すみません

お知らせ（前書き）

久々の投稿ですが、すみません

お知らせ

パソコンの調子が悪く、なかなか投稿出来ません。

しかも、家族で、遠出もするので、今月中はあまり投稿できなくなるのでお詫言えます。

この小説をご愛読の皆さんには、本当に申し訳ありませんでした。

来月までには、次の話を投稿できるとおもっているので、皆さん楽しみにしていて下さい。

こんな事になってしまいましたが、みなさん、どうか飽きずに、みていてください。

おねがいします。

わたしは、こんな駄文ばかり投稿していますが、よんでくれてありがとうございます。

アクセス数が増える度にやる気が出てきます。

これからも、読んで下さい。お願いします。では！

力（前書き）

パソコン直りました。

早く直ってよかったです。

がんばっていきますね！

力

決闘のあと、俺はファイター形態になって戻った。が、ルイズに質問攻めにあい、素直に答えたら余計怒られた。なぜに？

そのまま時間が過ぎていき、今は深夜だ。

紅「さて、鍛錬やるかな。黒刀、セットアップだ。」

黒（オールライト、セットアップ！！）

俺は黒刀をセットアップし、鍛錬を始める。

最初に素振りをする。

だが、正面にだけする。もちろん、太刀筋がぶれないようにするためだ。これを太刀筋がぶれなくなるまでやる。

ぶれなくなったら、今度は、黒刀に的を出してもらい、とにかく、斬る。

袈裟懸けに、垂直に、水平になどなど、これを一時間続けて、黒刀を解除し、今度はメサイアをセットアップさせる。

紅「メサイア、セットアップ」

メ（オールライト、セットアップ！！）

そして、今度は空中に無数のスフィアを展開させ、武器をガンポッ

ドにして、乱射する。

このときに、スフィアに当たる弾は一発、しかも、真ん中に当てなければならぬ、当てられなかったら、そのまま残り、もう一発弾が当たったら、色が変わる。

この鍛錬が終わったら、2、3キロ離れたところに、スフィアを形成し、絶えず動くようにメサイアに操作させ、俺はそのスフィアをスナイパーライフルで、撃ち抜く。これも、真ん中を撃ち抜かなければ消えずに残る。

そんな鍛錬をやりおえて部屋に戻ろうとバリアアーマーを解除し、戻ろうとするが、進行方向にタバサがいた。

紅「タバサか、どうしたんだ？」

タ「貴方は凄い力をもってる。私の力がどこまで通じるか試したい。」

そう言う呪文を唱えて、襲い掛かってきた。

紅「しゃあねえな！」

黒刀を武器だけ起動させ、飛んできた氷片を斬り刻む。

その後、一瞬でタバサの後ろをとり、黒刀を突きつけ

紅「降参するか？」

タ「……する」

すぐに退かす。

紅「で、どうだった？」

タ「やっぱり、敵わなかった。」

紅「そうか。じゃあ、戻ろっぜ？」

そのまま、無言で歩き出す。

そして、無言で別れる。

結局、何がしたかったのか、分からなかったな

力（後書き）

ちょっと短かったですね。

やっぱり、自分には文才無いですね〜全然書けない。

そういえば、感想が、まだ三つしか来ませんでした。

いろんな人から感想をもらうと、とてもうれしいです。ですが批判がくると、改善するよう努力しますが、とても悲しくなってしまうですね。前もらった感想で、来ましたがとてもショックを受けてしまいましたね。そんなことにならない様にしたいですね。

さて、話が変わりますが皆さんCLANNADを知っていますか？

あの話はとても感動できます。作者は泣きまくりました。ちなみに泣いたところは、after storyのほうですね。第一期は春原の面白い行動に見入ってしまいました。

皆さん、一度みたら、きっと、自分に子供ができたら、優しくしてあげようと思うようになると思います。

それほどのアニメです。ちなみにYouTubeで「clannad 泣かなきゃ負け！！名場面」と打って、その動画を見れば、泣けますよ。作者は第一期を一、二話見ただけなのにその動画を見て、泣きました。

では、これにて。さようなら！！

帰還（前書き）

話が全然思いつかない。

帰還

結局あの後には、部屋に戻って寝た。

数日後

ル「ねえ、アンタは確か自分の世界に帰れるんだったわよね？」

紅「ああ、確かに戻れる。が、お前が聞きたいのはなぜ、あの時帰らなかったかだろう？」

いつか来ると思っていた質問キター

ル「そうよ。なんで？」

作者「ここから、裏設定なことが登場します。本編では書いていなかったので不審に思われるかと思いますがご了承ください。では！」

ル「だれよ？いまの」

紅「俺も知らん。話を戻すぞ？なんであの時帰らなかったかだな？」

一応確認を取る。なぜなら作者もそうするからだ！！

ル「そうよ！早く言いなさい！」

紅「あせるな。で、何でかというと、あの時、次元が乱れていてな。あの時に戻っていたら、色々とやばかったんだよ」

ル「何がどうやばかったの？」

紅「時代が変わっている可能性があった。」

ル「時代が変わるって、なんで？」

紅「この世界にだけ、なんか特殊なバリアみたいなものが張ってあって、無理に抜けるとさっき言ったみたいなことになる可能性がある。ったんだ。」

ル「じゃあ、アンタは帰れるけど、元居た時代には帰れないってこと？」

紅「いや、帰れるぞ」

ル「どうやって？」

紅「この世界を覆っているバリアの一部に穴を開けてそこから抜ける。」

ルイズが呆氣にとられて、ポカーンとしている。が、すぐに氣を取り戻して言うてきた。

ル「その開けた穴はどうするのよ？」

紅「それは、バリア事態が修復機能持つてるから心配ない。」

ル「じゃあ、アンタって、もう帰れるの？」

紅「そうだ。もう帰ろうと思っていた。今から帰る。メサイアセツトアップ」

メ（オールライト、セツトアップ）

俺はメサイアを起動させ、窓から外に出る。

紅「じゃあな、ルイズ」

ル「アンタも元気に生きなさいよ！」

紅「メサイア、フォールドシステム、起動。目的地、地球」

メ（イエス、マスター。フォールド用魔方陣、展開、固定、ファイター形態となり、突入してください。）

俺はファイター形態となり、魔方陣に飛び込んだ。

海鳴市

な「紅君、どこに行っちゃったんだろう？」

紅君が居なくなつて一ヶ月、紅君の部屋には置手紙があつたけど、心配なの！

レ（マスター、未確認の魔力反応を感知、こちらに向かっています。）

な「え？」

そう言つた瞬間、空の色が、モノクロになつた。

な「結界？レイジングハート、どこか広い所無い？」

レ（近くのビルの屋上なんかはどうでしょうか？）

な「其処に行くよ！レイジングハート、セットアップ！」

レ（オールライト、セットアップ！）

私はすぐにそのビルの屋上に降り立って、あたりを見渡す。

レ（マスター、後ろからきます。）

？「うおりゃあああ！」

な「くうううう！」

私はすぐにプロテクションを張って防御した。けど

？「ぶち抜けえー！」

すぐにプロテクションにひびが入った。けど

レ（バースト）

プロテクションを破棄してバーストさせて、その内に空に上がる。
けど

？「ゆるさねえ！」

なんか、怒ってる？

？「グラーファイゼン、ロードカードリッジ！」

すると、あの子が持つてる槌から薬莢がでてきた。すると、形が変

わった。何かくる。

？「ラケーケンハンマー！！」

プロテクションでガードするけど、このままじゃあ破られる。

？「ぶちぬけええええ！！」

な「きゃあああああ！！」

プロテクションが破られて、くらっちゃった。まずい

私は、呼んだ

な「紅くん！！」

？「ラストオ！！」

あの子の武器が振り下ろされた。

咄嗟に目を瞑ってしまう。けど、衝撃が来ない代わりに、懐かしい声を聞いた。

紅「大丈夫か？なのは？」

目を開けると、そこには

紅「ただいま、なのは」

紅くんがいた。

帰還（後書き）

前回よりはかけました。

帰還後（前書き）

話が思いつかなくて更新が遅れています。すみません

帰還後

俺はいま、次元空間を移動している。

その様子は、フォールドをしているのと大して変わらない。ちなみにここで戦闘もできる。

メ（マスター、フォールド空間を抜けます。）

紅「りょーかい」

そして、俺は、海鳴市に帰ってきた。が

メ（マスター此処は結界の中です。魔力反応は二つ、一つは・・・なのは譲です！）

紅「なんで？」

まあ、いいか。

紅「メサイア、物陰から様子を伺う。危険になったら助ける。」

メ（イエス、マスター）

こうして、俺は様子を伺っていたけど、あれってヴィータだよな？
てことはこのあと、ザフィーラとシグナムもくるよな？今のうちに助けたほうがいいか？

メ（マスター！！なのは譲が！！）

げ！もうあの場面か？フェイト達の反応もまだ遠いし、俺がやるか

紅「行くぞ、メサイア」

メ（イエス、マスター）

俺は、シールドの中からナイフを出して、ヴィータのグラーファイゼンを受け止めて、なのはに言った。

紅「ただいま、なのは」

ヴィータサイド

私は、町の中にデカイ魔力反応を見つけて、その馬鹿でかい魔力を保持してる高町なんとかってやつと戦ってる。

でも、やっと追い詰めたのに、青いロボットが出てきて、そいつが持つてるナイフでグラーファイゼンを受け止めやがった。おもしれえ、相手してやる。しかもこいつの魔力も半端なくデカイ、今日は

ついてるぜ

ヴ「てめえの魔力も貰っていくぜ」

紅「できるならやってみろ」

こいつ、なめた口利きやがって私は怒りに任せて、攻撃した。が

紅「こんな者か？」

そのロボットは、傷一つついていなかった。防御をする暇も無い筈なのに

ヴ「てめえ、何なんだ！」

私は思わずきいた。

紅「俺は、なのはの友達だ」

紅サイド

俺が防御した後、ヴィータがメツチャ攻撃してきた。それを俺は、全部ナイフで叩き切った。そしたら、

ヴ「てめえ、何なんだ！」

で、聞いてきたので

紅「俺は、なのはの友達だ」

って返した。

え？パクリ？良いじゃん、言いたかったんだから。

まあ、パクったのは事実だから謝ろう。心の中で

（フェイト、ごめん。台詞パクって）

さて、反撃行きますか！！

紅「これを避けきれたら、凄いぞ？」

俺は新しくメサイアに付けた機能、スーパーパックを装備し、ミサイルのロックをすべてヴィータにしてミサイルが入っている蓋をすべて開け、言った

紅「避けきれたらな」

そして、俺は全部で百以上もあるミサイルをヴィーター人に向けて、一気に放った。

そして、ヴィータに当たる寸前に

？「飛竜一閃！！」

連結刃を持って現れたもう一人の騎士に、落とされてしまった。

紅「仕方ねえな、コッチには戦う気は無い。退散させてもらう。」

とりあえず、なのはをコッチに向かっているフェイト達の所に送る。

紅「なのは、後は任せろ」

な「え？紅君！？」

なのはを転送して、

紅「じゃあねー追いかけてくるなよ？きたら・・・殺す！！」

強めの殺気出してから、転送して、フェイト達のところに行った。

帰還後（後書き）

更新がまたも遅くなりそうです。

帰還後2（前書き）

遅くてすみません。

帰還後2

俺はシグナム達に殺気をぶつけてフェイト達の所に転送した。

転送先で見たのは

なのはとフェイトが抱き締めあっていて、その後ろで困惑している
ユーノのアリシア、アルフだった。

なんだ？このシーン？なのはとフェイトの百合疑惑のシーンか？

しばらくそのままの状態でしたら、フェイトが俺が居るのに気が付
いて

フ「紅！」

なのはを放して俺に飛びついてきた。その時なのはから殺気が来た
のは間違いだと思いたい。

この後、俺は家に連れて行かれ、今まで居なくなっていた事へのO
H A N A S Iを受けた。

日の出まで。・・・始まった時間は・・・11時頃だったかなあ

そして、今は学校、久々？の登校だぜ！

先生からのオハナシや、クラスメイトからのオハナシ（男子からはなのはたちを不安にさせやがってと殴られた。殴り返したけど）を受けて、昼休みには、あのボクサーのように真っ白に燃え尽きたのだが、なのは達に屋上に拉致られ、アリサとすずかにO H A N A S Iされた。

俺のHPはもう0だあああ！

学校が終わり、下校中

A「で、アンタはどこに行ってたのよ？」

な「私も気になる〜」

F「教えてくれなかったら・・・トライデントスマッシュャー当てるよ？」

フェイトが黒い（汗）

紅「異世界に行っていました。（泣）」

フ「異世界って、ミッドチルダ？」

紅「いや、管理局外の世界だった」

だってバリア張ってあったしねえ

フ「そうなんだ。まあ良いや。紅はこうして無事に帰ってきてるんだし」

紅「さっさと帰ろうぜ？」

早く帰って寝たいので提案する

な「そうだね。」

こうして、俺は家に速やかに帰り、寝るはずだった。なのに、

リ「お邪魔してます。」

エ「してまーす。」

なんでリンディとエイミィが俺の家にいるんだよおお！！

この後、どこに行っていたか言って、追い出して寝ようとしたが、リンディから、管理局を信用してくれと言ってきたが断ってさつさと寝た。

さて、この報告を受けて管理局上層部はどんなことをするかな？

まあ、退屈しないのは確かだな。

帰還後2（後書き）

ストーリーが浮かばず、放置していました。

神降臨（前書き）

遅れに遅れてすみません

神降臨

コツチに帰ってきて、二日目、部屋に神が降臨していた。

神「ヤッホー！遊びに来たぞ」

ズガン！！ ガッシャーン！！！！

何があつたかというと、俺が神を見た瞬間に蹴り飛ばした。『グエエ！！』とか言ってたけど気にしない。

神「なにするんじやい！危うく意識が飛ぶ所じゃったぞ！！」

あれで意識が飛ぶだけか。面白くねえな。

紅「まあ良い。何しに来た？何の用も無いのに降りて来る訳無いと思うから聞くけど？」

用が無かったら今度は外に蹴り飛ばす。

神「用は君にやったデバイスの黒刀をちよいと改造しようと思うての？ちよいと借りるぞ？ああ、安心せい。すぐに終わるから。」

紅「改造？まあいい。ほらよ」

黒刀を渡して様子を見る。

神は黒刀を握り閉めると数秒目を閉じた。んで、目を開けたら

神「終わったぞ」

どうも終わったらしい。どんな機能付けたんだか

紅「おい、どんな機能を付けたんだ？」

聞いた

神「起動すれば分かるぞ」

紅「なんだ？つまりやって見てのお楽しみか？」

神「そうじゃ。じゃあの」

神は帰った。まあいいか。とりあえず山に行って結界張って試して見るか。

山の中

紅「黒刀、セットアップ！」

黒（イエス、マスター）

黒刀をセットアップしたが、何も変わらず

紅「どこが変わったんだ？」

黒刀に聞いて見ることにした。

黒（神は私に『変化』という機能を持たせました。）

紅「変化ってことはどんな形にでもなれるってことか？」

そしたら最強じゃね？

黒（いえ、この『変化』という能力はマスターが『知っている』デバイスに『変化』し、そのデバイスの能力、技などを『完璧』に『使いこなす』ことが出来る能力です。）

紅「……………最強じゃね？」

どんな能力だよ！本当に一言で言えばレイジングハートとか、バルディッシュとか、グラーファイゼンとか、レヴァンティンとか、クラーヴイントとか、デュランダルとかを完璧に使えるんでしょ？最強じゃないか！！

紅「じゃあ、『変化』レヴァンティン」

黒（イエス、マスター。変化　レヴァンティン！！）

黒刀が『変化』して、シグナムが使っているデバイス、レヴァンティンになった。

紅「完璧に使いこなすってのはシグナムが使っている技を使えるって事だよな？」

黒（そうです。）

紅「だったら！黒刀、ロードカートリッジ――」

ガシャン――！

カートリッジをロードしたら、レヴァンティンとなった黒刀の剣身を深い青の炎が包み込む。そして

紅「紫電一閃――」

的として作ったスフィアを斬り捨てた。

紅「やっぱり出来た。だったら、黒刀、シュランゲフォルム――」

黒（シュランゲフォルム――）

そして、シュランゲにして、魔力を込めて、的を、薙ぎ払う――！

紅「飛竜一閃――」

スフィアを大量に薙ぎ払えた。

そして遠くにスフィアを一つ形成し、的として設置する。そして鞘と柄を付けて

紅「黒刀、ボーゲンフォルム――」

黒（ボーゲンフォルム――）

黒刀をボーゲンフォルムにして、構える。カートリッジを二個ロードし、矢に込める。

ちなみに矢の色は深い青

紅「翔けよ隼！！」

黒（シュツルムファルケン！！）

そしてその矢は、音速を超えてスフィアを打ち抜いた。

この事知ったら、フェイトに特訓の相手させられそう。

神降臨（後書き）

最強に話がいつかない。

またもや（前書き）

とりあえず、主人公を最強に改造中WWW

またもや

次の日、また神が降臨していた。とりあえず

バキッ！！

「ギヤアアアアアアアアアア……」

蹴って外に出しておいた。ストレス解消には良いね！

神「何をするんじや！！」

紅「あゝあ、生きてたよ」

本当に残念だ。死ねば良かったのに

神「酷くね？ワシに対しての態度酷くね？」

部屋の隅によって壁に喋りかけてるよ。ありやあもう末期だな。

紅「用が無いなら帰れ」

シッシというジェスチャーも忘れずに。

神「ワシ、君にデバイスをあげようとしただけなのに……」

デバイス？

紅「新しいデバイス？くねんの？」

神「うむ！あげようと思ってきたのじゃ！」

紅「どんなデバイスなんだ？つか早くよこせ？」

神がすぐにペンダントを渡してきた。色はもちろん黒。

紅「んで、どんな機能なんだ？」

神「君の持っているデバイスじゃと、いろんな戦況に対応が遅れそうじゃったから、接近戦も、遠距離も、広範囲殲滅も、高速移動もできるデバイスじゃ！」

神はえっへん！と胸を張った。

紅「そいつはどんなバリアジャケットなんだ？それとも俺が決めるのか？」

そこんとこ、重要

神「いや、バリアジャケットではなく、バリアアーマーじゃな、容貌は流星のロックマンのブラックエースじゃ！」

紅「あのかっこいいのか？」

神「そうじゃ！このデバイスを装備すると、ブラックエースになれる。背中のノイズウイングバーニアから、ノイズを大量に噴射し高速で動けるのじゃ。攻撃はロックバスターか、バトルカードじゃ。顔に付いているバイザーに敵に有効なバトルカードが表示されるから、そのバトルカードの名前をいえば装備される。それと、ノイズ

を取り込むとどんどんスピードや攻撃力が上がっていくぞ。ノイズの取り込みは常時自動でやっているから、セットアップしてつたつとるだけでどんどん強くなるぞ。ノイズはバーニアから常時散布されておるからノイズ切れなんて起こさんぞ？通常時の強さは最強、速さは一瞬で音速じゃからの。体には負荷が掛からんから大丈夫じやぞ。ちなみにノイズは、敵の持っているデバイスや機械類を狂わせるのじゃ。味方の区別はお主の思考によるから模擬戦でも効果を發揮できるぞ。ノイズも操れるから、ノイズを圧縮して弾として撃ったり、剣にしたり、盾にしたりできるぞ。ノイズを散布してレーダーから隠れるなんてことも可能じゃ。ちなみにこのデバイスをセッとしたままでも黒刀とメサイアを装備できるぞ。武器としてじゃジャケットは装備されん。もちろん、ブラックエンドギャラクシーもできるぞ。ちなみにそのデバイスの名前はエースじゃ。それじゃあの。」

エ（よろしくお願いします。マスター）

紅「おう、よろしく」

早速、セットアップするか。

山

紅「エース、セツトアップ」

エ（オールライト、セツトアップ！！）

とりあえず、左腕をロックバスターに変えて

紅「ロックバスター！！」

そして大きな岩に撃つ。すると

ドッガン！！

岩が粉々、しかもたった一発。一発でこの威力、しかもこれ超連射できるから……うん、化け物！

次にバーニアを吹かし、垂直に空に上がる。弱く出してもすぐに雲あたりに来た。全力でやったら……地球一周を一秒でできるだろうな。

バトルカードは……止めよう。怖い

とりあえず解除して家に帰る。

エースを基本にして、黒刀とメサイアは武器として使おう。うん、それがいい。

戦い方は、最初に黒刀とかで戦って、強かったらバトルカードだな

たぶん、バトルカード使うこと無いと思う。

神が言ってた広範囲殲滅するのはノイズ大量に圧縮して放つんだと思う。管理局の違法研究所潰すのに丁度いいけど、どれだけ威力あるか分かってないから練習しなきゃあな

またもや（後書き）

最強装備、登場

元の世界（前書き）

久しぶりの投稿です。
なかなか思いつかなくてすみません！

元の世界

どうも、皆さんお久しぶりです。ただいま、無理やり入れられた管理局の仕事をしています。

しかもその仕事が面倒で面倒で、なにせ高ランク次元犯罪者の逮捕だよ？まあ、面倒なだけなんだけどさ？しかもロスト・ロギア持つてるって情報だし、これも面倒な理由なんだよね〜

そんなこともあり、今は次元犯罪者追っております。

紅「なあ、もう捕まってくんねえか？もう俺飽きたよ？アンタを弄るの」

ちなみに犯罪者はロスト・ロギアをコッチに向けてる。効果は資料に書いてなかった。

犯「捕まってたまるか！くらえ！」

犯罪者はロスト・ロギアを発動させた。が、現れたのは黒い球体

紅「なんだ、それは？」

そういったのもつかの間、いきなり凄い勢いで俺と犯罪者を吸い込み始めた。

犯「なぜだあ〜」

犯罪者はすぐ近くにいたので、すぐに吸い込まれた。

紅「エース、セットアップ」

エースで脱出を図る。が、

エ（セットアップできません！）

紅「なんでだ〜」

俺も、吸い込まれた。

紅「痛え」

俺が目覚めたのは森の中で、体中痛い。

すぐに犯罪者の居場所を探す。

紅「いた。ここから800m北の所に居る。エース、セットアップ」

エ（イエス、セットアップ）

エースをセットアップして犯罪者の居るところに向かう。町の真上を通った。なんか見たことあるな、この町。

犯罪者サイド

目を覚ましたら、沢山の人ばかりが出来ていた。俺はすぐに辺りを見渡した。そして、空にアイツがいた。すぐに手短にいた女を捕まえて、ナイフを突きつけた。ちなみにロスト・ロギアは壊れていた。つかえねえ。

犯「おい、動くなよ？動いたら刺すぞ！」

俺はアイツに向けていった

紅サイド

犯罪者が女性にナイフ突きつけて動くなといっている。すぐに助けられるけど、まずは様子見。

犯「おい、お前、降りてデバイスを解除しろ、今すぐだ！」

ちつと舌打ちをして俺はエースを解除した。そしたら、人質の女性と、人だかりに居た何人かの男性が

「紅！？なんで生きてるんだ？確か死んだはずじゃないのか？」

紅「なんでここに居るんだ？此処は俺の世界なのか？」

何でこの世界に戻ってるんだ？まさかあのロスト・ログアのせいかな？まあ良い、さっさと終わらせようか！！

紅「そいつから手を離せ」

俺は犯罪者に最後の警告をする。

犯「命令するのはおまえじゃねえんだよおお」

なんか焦ってるしさつさと終わらせる。

俺は一瞬でエースをセツトアップして犯罪者の後ろに回りこんで手刀を打ち込んで気絶させて、ミッドチルダに帰った。もちろん、犯罪者を担いで。

元の世界（後書き）

わけの分からん話になってしまった。
すみません、訳分からなくて

お知らせ式（前書き）

お知らせです。

お知らせ

前回投稿した話が作者的に余りにも最悪な状況になっていたので近いうちに書き直します。

ですが、今はテスト期間なので書き直しは再来週ぐらいになると思っています。

この小説を読んでくれている皆さんに謝罪します。すみませんでした。

こんな下手な小説を書いてしまつて。

ほんとにすみません。

しっかりとした本編を書き直します。すいません。

そして、今もなお、ご愛読の人に感謝します。

ありがとうございます。

本当にありがとうございます。

Thank you for loving reading this novel.
We are looking forward to hear

i
n
g

f
r
o
m

y
o
u
.

お知らせ式（後書き）

最近ポケットモンスターホワイトを買いました。

バッジ五個目まで真面目にやってたけど、面倒になってしまい、弟がブラックを三日で四天王倒してポケシフター出来るので、頼んでパールから主力ポケモン送ってもらい、四天王まですぐに倒してしまつて殿堂入りしました。

正直、このことからやる気が無いことが伺えるかと思いますが、やる気はあります。どうか、非難しないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295/>

転生

2010年10月12日02時07分発行